

# 伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇一二年 第六六号

伊能忠敬研究会



## 伊能大図第29号室蘭 (アメリカ議会図書館蔵)



室蘭は、エトモ半島に抱えられた内湾が良港となり、明治以降には製鉄所などの立地があり工業都市として発達した。室蘭(モロラン)発祥の地は、大図で見ると、エトモ半島の対岸であり、幕末には、蝦夷警備のため、南部藩の陣屋が設置され、史跡として残っている。

第一次測量において、蝦夷の南岸を往復した伊能測量隊は、往路は、モロランからワシベツ、ホロボツへ海岸と山中を交互に測進していったようである。帰路はワシベツからエトモ半島をエトモまで測り、船でモロランに渡っている。最終成果の大図(明治初期に陸軍が模写、アメリカ議会図書館蔵)を見ると、測線は室蘭の湾の海岸線に沿って囲んでおり、湾からワシベツに抜けるエトモ半島の基部は山地ではなく平地である。山中の測線は描かれていない。エトモまでの測線は湾の海岸線を描いており、エトモ半島の外側は測量できず、海岸線もぼかして描いている。

一方、第一次測量の成果である蝦夷地大図(東京国立博物館蔵)を見ると、モロランからワシベツへ内陸を横切る測線が描かれており、往路に山中を通過したという日記の記載と合致している。帰路の測線も日記の記載の通り、エトモまで測量しているが、海岸線ではなく、エトモ半島の内部を測量していることがわかる。また、記載された地名は、最終成果に比べると非常に少ない。

以上のように、第一次測量の成果である東京国立博物館蔵蝦夷地大図と最終成果との間には、描かれた測線、エトモ半島の形など大きな違いがあり、最終成果においては、第一次測量の成果は採用されていないことがわかる。最終成果の測線を見ると、エトモ半島の外海に向かって分岐した測線がいくつか見られる。これらは、間宮林蔵の測量によるものであり、歩測によった蝦夷測量の精度には忠敬自身が限界を知っており、間宮林蔵の測量成果を全面的に採用したのであろう。

星埜由尚 (表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

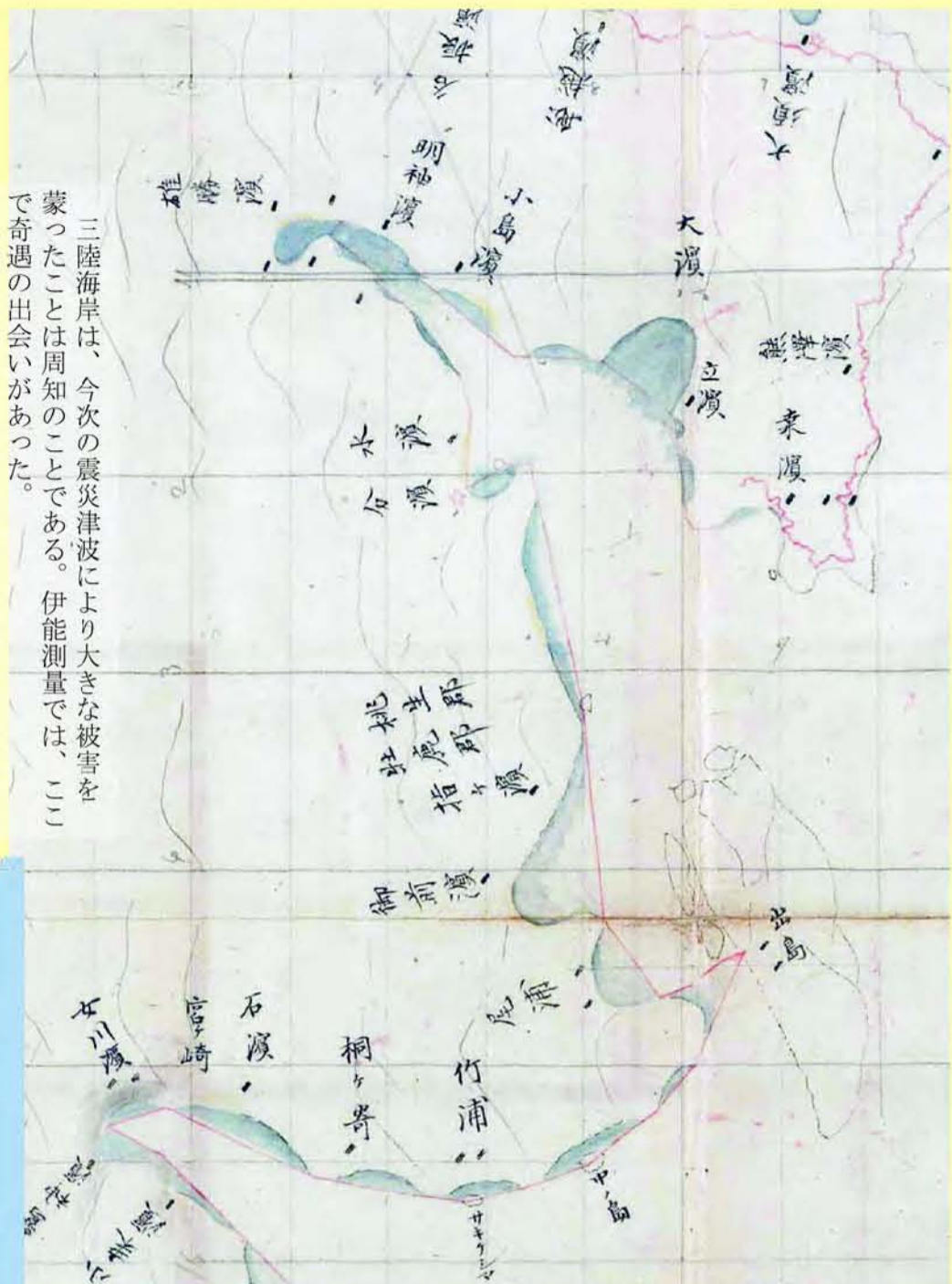
# 奥羽国桃生郡 分浜

星 埜 由 尚

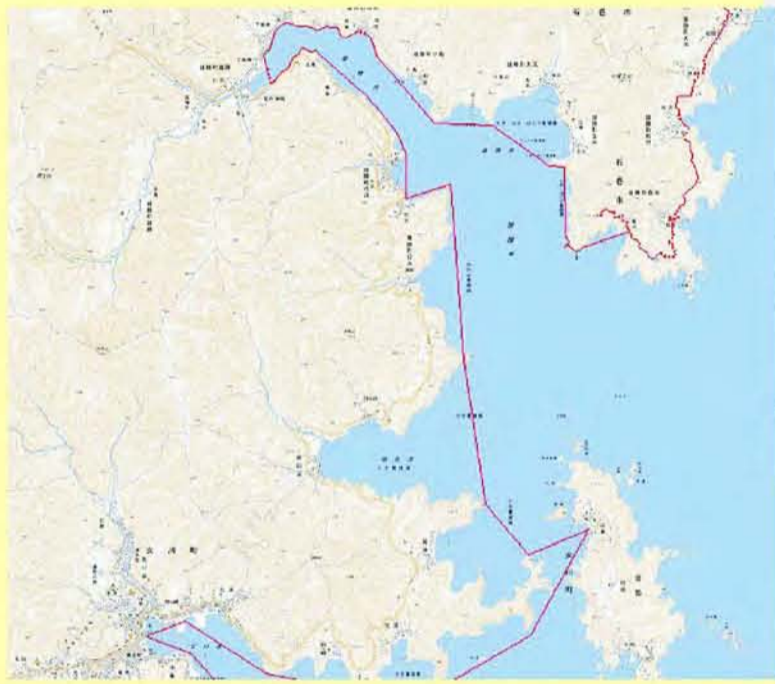
三陸海岸は、今次の震災津波により大きな被害を蒙ったことは周知のことである。伊能測量では、ここで奇遇の出会いがあった。

享和元年九月八日、第二次測量において女川浜と雄勝浜の間の分浜において秋山惣兵衛方に止宿した。この秋山惣兵衛という人は、忠敬が先年亡妻のミチとともに奥州松島の遊覧に出かけた際、佐原から銚田までの船の中で会った人である。秋山惣兵衛は分浜の商人で、商用で銚子港まで行き、その帰りであった。一人旅ゆえ一緒に、仙台まで同行する。途中宿の手配など懇ろに世話を焼いてくれ、仙台では、名所を案内され、酒肴のもてなしまで受けて又の再会を約して別れを惜しんだ。その人の屋敷に分浜で偶然にも止宿することになったのである。二十四年ぶりの懐かしき出合いに語り合い、別離を惜しんで、秋山惣兵衛は、翌日の出発から四日間を共にし、十二日に長面浜と言うところまで送ってきたのである。

忠敬は、余程感銘を受けたのであろう。測量日記に細かく顛末を記している。江戸時代の人間関係の一端を示していると思える。分浜も津波による大きな被害を受けた。



アメリカ大図第48号「石巻」部分



「国土地理院地形図と伊能測線の重ね図」  
(東京カートグラフィック(株)猪原紘太氏作成)

## グラビア

### ● 伊能図の旅

大図一〇五号より 八丈島  
中図第六図より 岡山  
大図二〇七・一二二号より 御前崎

星 埜 由 尚 1

## 話題

### ● 史料解説

高橋 (景保) 御用日記 (一)

安藤由紀子 6

### ● 伊能測量現地史料紹介⑨

長州藩毛利家の伊能測量記録 (二)

河島悦子・鈴木純子・  
伊藤栄子・渡辺一郎 17

### ● 「香とりの日記」の頃

伊能楯雄 23

### ● 忠敬旧宅雑録 (三)

伊能洋 26

## 忠敬談話室

### ● 伊能測量漫筆 一

第二次測量に松平定信の影

渡辺一郎 28

### ● シーボルトの原因を求めて

ブランドンシュタイン城訪問記

渡辺一郎 30

## 資料 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

渡辺一郎監修・井上辰男編著 32

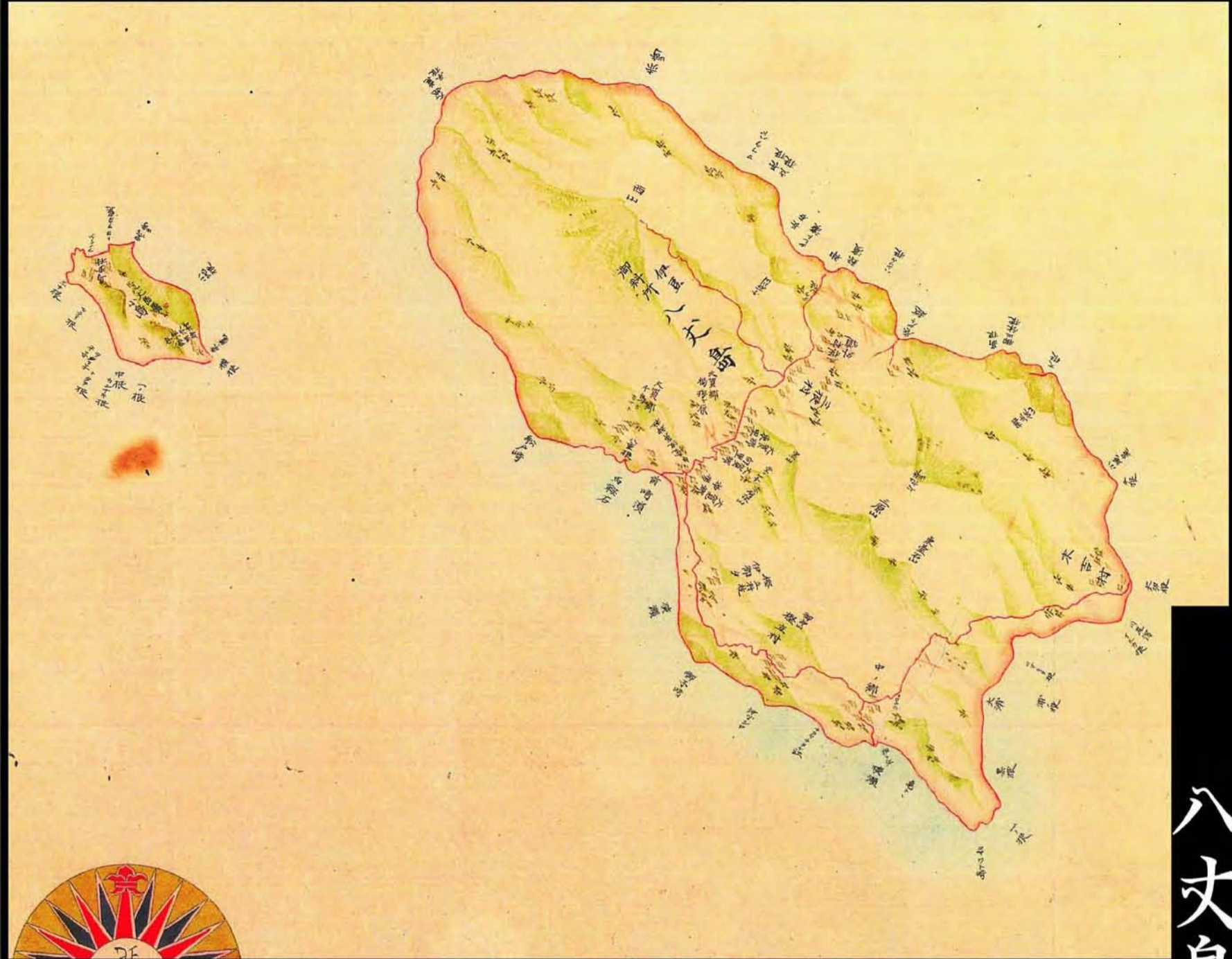
## ニュース・お知らせ

各地のニュース・新入会員紹介・会員便り・  
支部例会報告 ほか

編集部 42

表紙解説・伊能忠敬ゆかりの地めぐり 星埜由尚

# 伊能図の旅



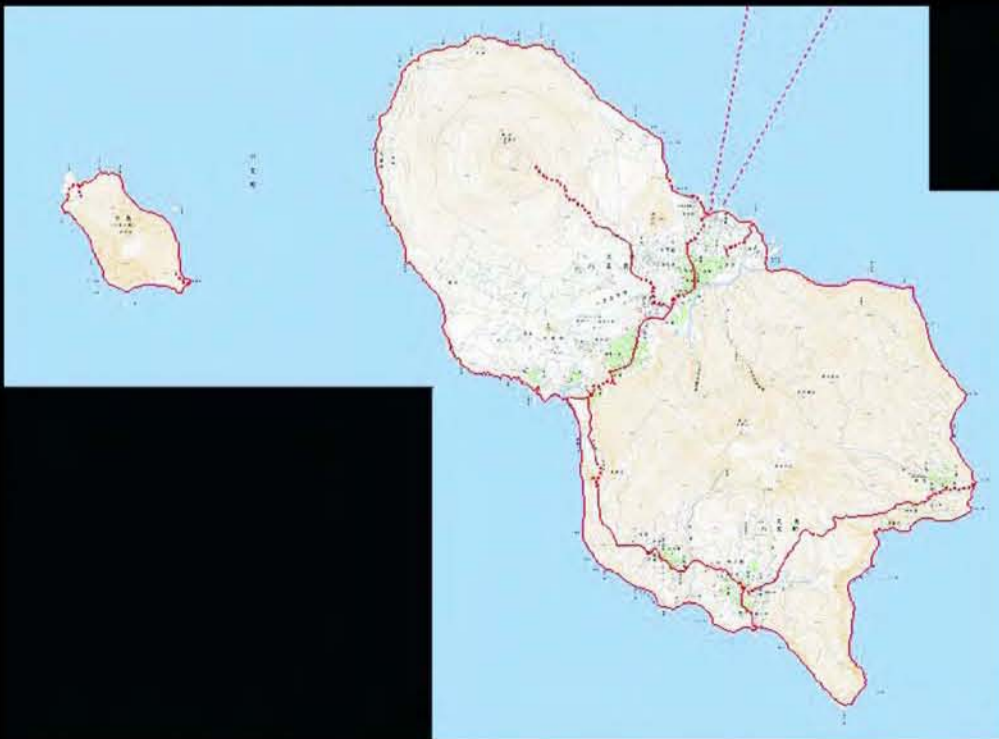
大図第一〇五号より

## 八丈島

伊豆七島は、八次にわたる全国測量が終了し、第九次測量として行われた。忠敬は七〇歳を越え参加していない。天文方下役と忠敬の弟子により測量された。伊豆の下田から三宅島に渡り、三宅島の一部を測量したのちにさらに八丈島に渡った。

三宅島から八丈島までは順風であったが、黒潮の流れが速く、七、八里もながされ、二筋の速い流れを抜けたと日記には記している。この流れに三宅島への帰路三晩漂流し、三浦三崎に漂着してしまう。

八丈島の測量は一ヶ月を越え、その間日食の観測も行い、八丈小島にもわたって測量した。八丈小島には、鳥打村と宇津木村の二ヶ村が当時あったが、現在は無人の島である。西山(八丈富士)にも何回も登頂したが、天候に恵まれず見通しが悪く、島の位置を求めるための遠測はうまくいかなかった。八丈島は、火山のため磁気の異常があり測量に支障を来したこともあったようである。(星椋)

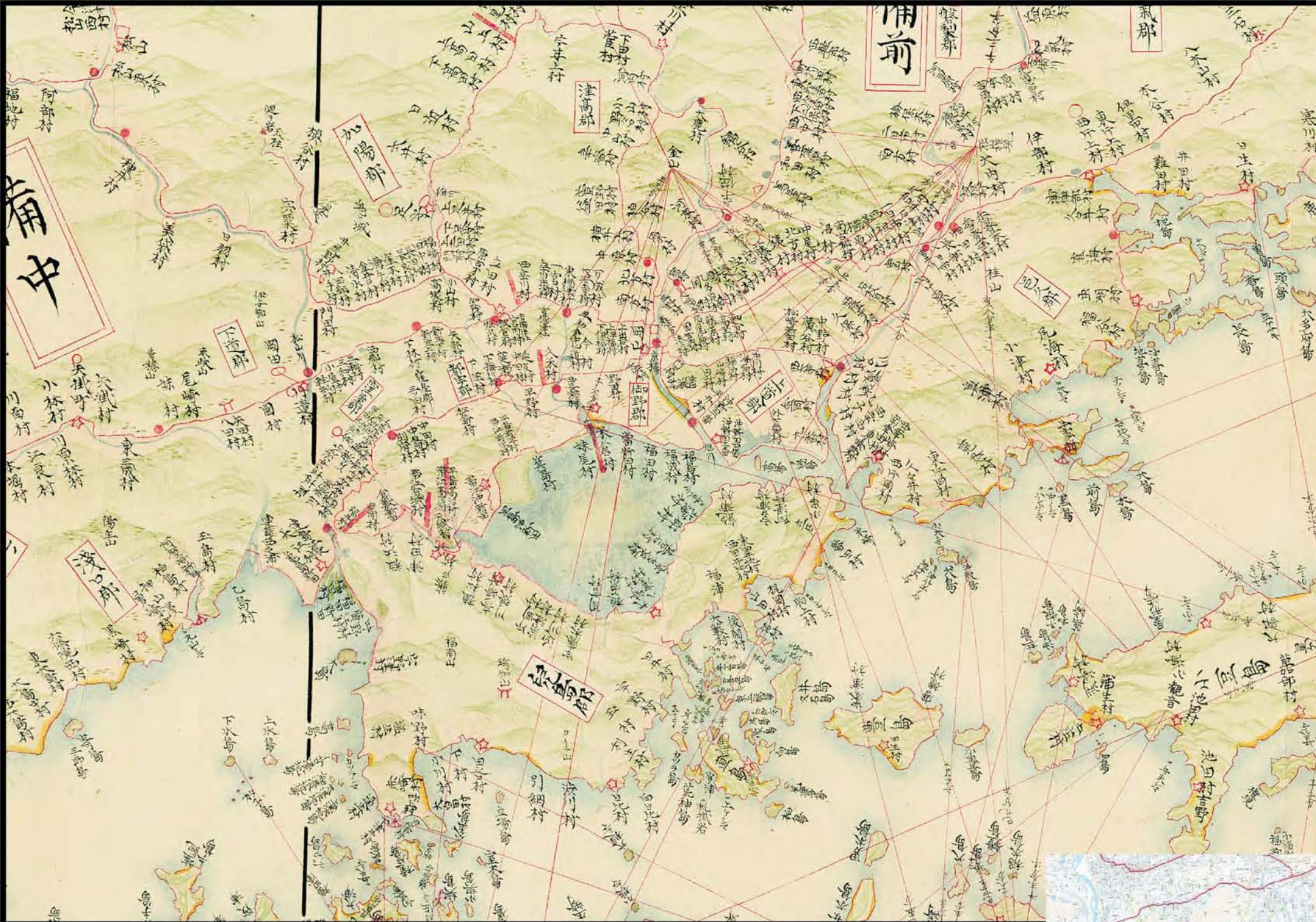


上：伊能大図第105号八丈島の部分(国立国会図書館蔵)  
下：測線と25000分1地形図重ね図(東京カートグラフィック猪原氏作成、地形図は国土地理院「電子国土」)

# 岡山

児島湾岸は、第五次測量において測量した。西大寺村から児島湾岸に出て九番村から一番村まで測量する。これらの村は、番号がつけられているように、児島湾の干拓により開発された新田の村であろう。外七番村から沖新田三番まで海中の土手のような所を測量している。これは、おそらく干拓のための締め切り堤であろう、土手の南には高島、鳩島という島が描かれているが、これらの島は現存し、土手の描かれているところまで干拓されて陸地が広がり、九番村も九幡と言う地名が残っている。

その後は、児島半島を一周して測量し、岡山に出たのは、文化二(一八〇五年)の十二月一日である。児島半島の付け根の彦崎村から船で岡山城下に渡った。当時は、児島湾に面していた彦崎村は、現在は、地形図を見てもわかるように広大な干拓地に面している。地形図と伊能図を比べてみると、児島湾の干拓が如何に大規模なものであるか一目瞭然である。岡山で越年し、翌年一月十八日に岡山を出生した。



上：伊能中図第6図部分岡山付近（日本写真印刷株式会社蔵）  
 下右：測線と25000分1地形図重ね図（東京カートグラフィック猪原氏作成、地形図は国土地理院「電子国土」）

# 御前崎

御前崎は、駿河湾と遠州灘の接点となる岬である。この海岸線は、第四次測量において測量されている。享和三(一八〇三年)三月十三日駿府を出立し、石部村、城腰村、川尻村、相良村、地頭方村御前崎と止宿して海岸線を測量している。川尻村の手前では、大井川を渡っている。

大図を見ると、大井川は、幅の狭い河口の部分で測線が横断しており、河口は砂州で閉塞されているように描かれている。河口部は分流し、二つの流れとなって駿河湾に注いでいる。分流している大井川の中には、飯淵村と飯淵新田の注記があり、「測量日記」には、この二つの村は、前年に洪水があり川になってしまったとの記述がある。

御前崎を見ると、岬の先にはいくつかの岩礁のような島が八つ描かれ、先端の島には沖御前と注記されている。現在の地形図を見ると、御前崎の先には、御前岩という灯台のある岩礁があるが、そのほかには島や岩礁は存在しない。御前崎の地殻変動は、東海地震との関係で重要な指標となっており、二百年前には存在した島又は岩礁が現在消失し、沖御前に比べると御前岩はかなり小さいことは、暗示的である。

左：大図111号「浜名湖」（アメリカ議会図書館蔵）と大図107号「静岡」（国立国会図書館蔵）の合成  
下：測線と25000分1地形図重ね図（東京カートグラフィック猪原氏作成、地形図は国土地理院「電子国土」）



史料解説

高橋(景保)御用日記(一)

安藤由紀子

(解説) 本稿は、伊能忠敬記念館所蔵の高橋景保の御用日記解説である。研究会発足以前に、故安藤由紀子さんと伊能陽子さんが協力して、伊能忠敬記念館の委嘱を受けて解説したものである。

文化二年、文化三年の測量御用に関し、景保と忠敬の間で送受した文書の控が記されており、天文方に伝えられた正式記録と考えていだろうか。

星塾代表が人力の労をとっていただいたので、順次整理して史料として掲載したいと思う。

袋とじの中に文化七年の記録が、二・三枚紛れこんでいて、そこに九州測量が二度も行われた理由の一端が記されている。このことは安藤さんもうっかりしていたらしい。年代が飛んでいると判明して記念館へいつて、原文書を紺野学芸員とめくつて、袋とじの中から見つけ出し、またそつと入れておいたが、どうなっているだろうか、無くなつては困るので、気になつている。

本稿は、伊能測量を正しく理解する上の基本文献の一つである。本当は、原本と再校正の上で発表すればよいのだが、国宝となつて取扱に慎重を要するので、安藤氏訳のまま紹介することとした。

なお、原文の中で淡黄色の背景色で示した文章は景保が記述した部分、薄墨色の背景色で示した文章は景保が引用して添えた部分である。(編集部)

まづ、勘定奉行・道中奉行の先触れから始まる。皆様おなじみですが、これが天文方に残っている正式記録です。

\*

一 左之書付写勘解由方より差越ス 則御勘定奉行道中奉行より之道触也

追而此触書早々相廻し承知之旨別紙請書相添留りより左近御役所江可相返候 已上

一人足壱人

伊能勘解由

馬式疋

高橋善助

一 馬壱疋宛

下役式人

右之外測量持運

一人足六人

一 馬 壱疋

一 長持壱棹

持人

右は此度東海道其外西国并中国筋海辺浦々測量為御用被差遣二付 書面之通り無賃之人馬被下間 宿々村々於めて其旨相心得往返共無滞可差出者也 二月廿四日

退出兵庫

和泉 印

左近 印

煩 飛驒 印

主膳 印

退出 美濃

伝馬町

東海道

品川より

舞阪 夫より

今切潮(ママ)水相廻り

新居

熱田より

佐屋通り

大宝新田

右海牛添ひ

桑名

伊勢

志摩

紀州

熊野浦通り

和哥浦

和泉

堺

住吉

大坂

西川口 夫より

伝馬川通り

淀川より

伏見

鴨川添ひ

京都

大津より

越前

敦賀

若狭

立石より

海辺通り

小浜より

丹後

但馬

因幡

伯耆

米子

出雲

湖水通り

隠岐

石見

長門

北海通り

赤間

周防

安芸

備後

備中

備前

播磨  
 総而南海辺通り  
 舞子浜より  
 淡路  
 阿波  
 徳島二向ひ  
 南海辺通り  
 土佐  
 伊豫  
 豊後  
 日向  
 大隅  
 都而東海添ひ  
 薩摩  
 鹿児島二向ひ  
 南西海辺通り  
 肥後  
 肥前  
 海辺二添ひ  
 天草  
 長崎二向ひ  
 海辺通り  
 壱岐  
 対馬  
 筑前  
 豊前  
 讃岐  
 阿波江立戻り  
 淡路江渡り  
 海辺通り  
 播州舞子浜江渡り  
 大坂江出 夫より  
 伏見  
 宇治川二添  
 草津より  
 桑名  
 木曾川二随ひ

起  
 名古屋通り  
 いほ二向ひ  
 飯田  
 甲府より  
 横山宿 夫より  
 内藤新宿迄  
 右宿々 村々  
 問屋  
 年寄  
 名主  
 組頭

覚  
 一 御勘定御奉行様御連印御触書一通  
 右は此度測量為御用 御役人中江戸御出立二付被成御渡  
 候間則差越申候 尤御触書之内削三ヶ所其外墨付よこれ  
 等無之候間 宿村大切二拜見之上早々継送り可被申候  
 以上

丑  
 二月廿四日  
 品川宿より  
 御用先々  
 宿村  
 問屋 中  
 名主

御伝馬役  
 高野新右衛門

右先触江伝馬町より添状左之通り

覚  
 一 御證文之写 三通  
 一 御先触 壱通  
 一 御休泊御書付壱通  
 一 箱二入

右は此度測量為御用御役人中明廿五日江戸御出立被  
 成候間則差越申候書面之通り用意可有之被 尤宿々村々  
 無滞様可被相触候以上

丑  
 御伝馬役  
 二月廿四日 高野新右衛門  
 品川宿より  
 御用先々  
 宿村  
 問屋 中  
 名主

天文方  
 高橋作左衛門手附  
 伊能勘解由  
 作左衛門弟  
 高橋善助

同下役式人  
 同内弟子四人

追而村々別紙請書相添早々順達可有之候已上

右は此度測量為御用東海道中国筋四国九州壱岐対馬  
 迄罷越候二付 当二月下旬頃穢土出立 道順之儀ハ  
 芝高輪より測量相始東海道筋遠州舞坂江掛 今切湖水  
 江相廻り夫より荒居江出 熱田より佐谷路右海辺廻り  
 罷越候由右二付 嶋々渡海之節は船を出シ差支無之様  
 可致候  
 尤測量道具為手入止宿いたし候節ハ差支無之様可取  
 斗 且廻村先より江戸領曆所江御用状差出候義も有之  
 候ハ、御役所御用使りにて差遣候間  
 早々可相届且又は江戸表より同人宛所へ御用状到来致  
 着已然二候ハ、其所に留置 着之上相届可申若出立

後候ハ先々江相届候様可致候  
右之通当支配所浦付村々并万石以下最寄私領村々一  
同可得其意此廻状早々順達留り村々より可相届者也  
丑 三月朔日

中泉  
御役所

遠州浦付

御料

私領村々

名主

組頭

百姓代

\*

右差越候節 存之外雨天相続日数相懸り候二付 隠  
岐渡海之儀当八九月頃二茂可相成 左候ハ、秋より冬  
ハ渡海風並悪敷候二付 当年道順二而ハ渡海難相成候  
二付大坂江出候而夫より播州江出逆二備前備中備後安  
芸周防長門石見出雲江出 夫より隠岐江相渡候ハ、時  
候も可宜候間 此段伺具候様申来ル二付 此儀は未夕  
時候宜哉否難相成折から 彼是同等差出候而ハ申立茂  
無之 且ハ御勘定奉行より触も出有之 其上諸大名  
諸地頭へ茂道順被仰渡候へは 伺ひとても上ハ  
可相济候へ共

御勘定所二而彼是六ヶ敷申候へは 万一隠岐測量相  
止ミ候儀も難斗二付 何れ雲州迄罷越 其上二て渡海  
難成候ハ、隠岐を相省キ 道順之通り出雲 石見 長  
門と相廻り候方可然段

委細五月二日志州鳥羽江向け書状差出ス 即御勘定  
組頭保田定市江相渡シ置 尤御勘定所江之添書 先月  
差出候案と同様なり

\*

五月九日勘解由御用先勢州山田より四月廿九日出二  
而書状到来 勢州曆師山口角左衛門より町便二而差越

又

同廿二日勘解由御用先 志州鳥羽より五月九日附二  
而封物到来 志州鳥羽城主稲垣信濃守より送達、紙封  
印ほどき候処 勘解由出立之節小普請方近藤重蔵より  
中国筋地圖二品借用 御用先持参写相济候二付 重蔵  
方へ差戻し具候様申来二付翌廿三日相達ス  
一 桑名宿より勢州曆師共江左之通申遣シ勢州地不案  
内二付承り合等致度二付召寄候由二而 写差越 勘ヶ  
由不事(ママ) 馴故 左之通執斗候事と見ゆ

\*

猶以山口角左衛門江之書状壱封相届可給候 已上

弥御無珍重存候 然は天文方高橋作左衛門手附伊能  
勘ヶ由 此度国々測量御用被仰付 拙者共右差添為御  
用 今般其江罷越候 右二付申談度義有之候間  
即別紙ヲ以相達候条 得其意事馴候者両三人罷出候様  
可被致候 即津城下迄之宿割左之通二候

四月十日泊 桑名

同 十一日泊 四日市

同 十二日泊 神戸

同 十三日泊 上野

同 十四日泊 津

右日限之通相越候得共 若雨天之節ハ其宿逼留日送り  
出立二候間可被(ママ) 其意候 以上  
四月十日

勢州

曆師中

坂部貞兵衛  
市野 金助

\*

測量為御用申談度義有之候間 津城下着日 右旅宿江  
其許方之内両三人罷出可被申候 以上  
四月十日

勢州

曆師中

坂部貞兵衛印  
市野金助 印

\*

測量御用二付勢州曆師共江申達茂有之候間此書状刻付  
を以早々継送り可被申候以上  
四月十日

四月十日

桑名宿より

四日市

神戸

上野

津

松坂

山田

右宿々

問屋

年寄 中

\*

一右便之節志州二において木星測量致候由二而測量記差  
越ス

青木伝蔵

坂部貞兵衛

伊藤吉左衛門

市野金助

勢州

曆師中

右封状二いたし十七日飛脚問屋大坂屋茂兵衛江差出  
ス 尤八日限なり

\*

一当月初旬勘解由御用先志州より書状到来之節



貞兵衛妻懐胎二而小兒等之養育ニ差支候間歸府いたし  
度段申來候二付 家内ハ自分引受ニ候へハ無心配相勤可  
申段差留申遣ス

\*

此度手附伊能勘解由御用先江御用状差遣申度候二付  
此封状壹封紀州田辺迄御遣し御座候様仕度

\*

この間、数丁 脱落（解読文漏れ）

\*

御切紙致拜見候 然ハ手附伊能勘解由方より御用状壹  
封到來候二付 紀伊殿御城附より御遣候由右二付請取之  
者差出申可旨被仰下致承知候 則手附之者差出候間  
此者江御渡可被下候 右可得御意如此御座候 以上

八月十一日

尚々右御切紙昨夜相達候二付 請取之者差出候茂致  
延引候 已上

\*

右出し候処早速封状請取歸ル 尤其状ハ先達而紀州田  
辺江出し置書状之返書なり 金助病氣並び内弟子父大病  
二付歸國可為致哉之段 到來尤是ハ先使ニも申し來候  
二付 内弟子之儀ハ其方ニ而如何様共取斗可申 此方  
江沙汰ニは不及候段先便之返書大坂江向ケ遣置

且又北海辺へ相廻り候頃冬ニ相成候二付 銘々致難  
洪可申 病人等も出來可申間 道順最様替之儀掛合往  
復也 尤此儀先便より度々及掛け合候処未決着無之  
尤道順最早替之儀ハ伺ニ不及 此方ニ而致差図且差  
掛候義ハ此方江承合セニ不及後ニ其段申越候答ニ先達  
而取扱致置候事也

この辺から尾鷲の大庄屋土井家文書で指摘した市野  
金助の俄か病氣と測量ルート変更の交渉が始まる。市  
野病氣のやり取りは、真に迫っていて本当かと思わせ  
られる。しかし、江戸に帰るとすぐ全快と、間の記録  
があるのだから、やはり、俄か病氣だ。  
それに付き合つて、道中の添え触れも渡しているか  
ら、忠敬はずいぶん辛抱していた。氣が長いほうでは  
なかつたから、大変だったろう。

\*

同廿日  
一左之通御勘定組頭より申來ル

高橋作左衛門様 松山惣右衛門

測量御用先紀州和歌山城下伊能勘解由方より貴様江  
之御用状紀伊殿御城附より請取置候間  
明廿一日四ツ時 例之通請取之タメ御城中之口江御  
差出有之候様存候 以上

八月廿日

\*

同廿一日  
一左之手紙為持御城御勘定所江中嶋長三郎遣ス

松山惣右衛門様 高橋作左衛門

昨日之御切紙致拜見候 然ハ測量御用先紀州和歌山  
城下伊能勘解由方より御用状壹封到來二付 紀伊殿御  
城附より御請取置候由依之請取之者差出候様被仰下致  
承知 即手附之者差出候間 此者江御渡可被下候 右  
可得御意如此御座候 以上

八月廿一日

\*

右手紙持参いたし差出候処 紀州和歌山城下より去

ル十日出之書状なり 左之義申來ル  
一市野金助儀紀州牟婁郡木本浦辺罷通候頃六月廿四日  
より 風と暑氣ニ当り胸痛強 其上足しひれ縮ミ難洪  
致 彼是医師ニモ相掛り申候得共驗も無之  
当所和歌山迄漸々召連参着致候処 金助儀申聞候は  
速茂此様子ニ而は急ニ全快も無覚束候間 当所より一  
先歸府致養生致度段 達而申聞候二付至極尤ニハ候へ  
とも

当所より出立候而ハ許より迷惑 其上彼是行届兼可  
申聞 一先大坂迄罷越 其上快方ニも趣さる様子ニ候  
ハ、大坂表より歸府可然段再申聞候処 漸致承知  
先大坂迄罷越候積り取極候段

右二付金助より之願書一通差出候二付差越旨申來 即  
左ニ写置

私儀去ル六月下旬より暑氣ニ相当 次第二病氣相變  
シ候而胸乳之辺強痛 其上逆上下冷仕 別而左之足筋  
縮ミ歩行不自由ニ罷成候二付紀州木本浦町医師宮崎見  
操藥服用仕候而も追日胸痛甚強仕候間

また依田辺表安藤順助殿醫師小川南叔藥相用猶又色  
々療治相加候得共旅中故行届兼 追々病氣增長且躰疲  
難儀仕 迎茂急ニは快氣之程無覚束奉存候

右醫師共も其段申聞 只今之躰ニ而ハ当分測量御用  
向可相勤躰無御座候間

江戸表御伺済通一応歸國仕 得と療養仕度 此段奉願  
候 右之趣御届申上 当和歌表より

歸國仕度奉存候間 可然浅草御役所江御届書御差出可  
被下候様奉願候 以上

八月九日

伊能勘解由殿 市野金助印

\*

右書付翌廿二日秋山松之丞江為見置尤同人病氣二付

委細之儀は不申聞 只書付而已為見候事

一右之節勘ヶ由并貞兵衛方より申越候ハ大坂着之上金助病氣快方二不趣候ハ、帰府之積り取斗可申其節ハ金助帰筋道中取斗方并大坂表より御用先々金助不罷在候二付 其断書添可遣哉之段申越候様申来ル

尤大坂着は当廿日二も候間 間二合不申候ハ、猶又相談之上可取斗旨申来ル

一右之段問合来候二付 連日左之通申遣ス尤大坂 間清市郎へ向ヶ遣シ置也 飛脚屋大坂屋茂兵衛江渡ス

一金助帰府道筋は 勘ヶ由より道中添触置

此度西国筋為測量御用罷越召連候市野金助義大坂表より病氣二付同所より為養生帰府致候間

御證文之通馬疋並伝馬也賃駕蓋か御定價錢を差遣し可申旨之先触印形付御證文写共金助自身先触へ添可遣事

一御用先々之義は金助義大坂より病氣二付為養生同所より帰府致候段 先触へ添遣し 扱又連名先触へハ金助名前相除 金助名面可入処へ細字二而市野金助義病氣二付帰府致候間名前相除候段 断書いたし可差遣

且又御證文馬疋と申義有之候間はハ所々二而相談致 御用二入候ハ、取用候而も不苦候

尤入用なく候ハ、其段金助病氣断添触へ 帰府致候間御證文之馬疋疋差出二不及候段書加差遣し可申事尤先触之箱二入一所二とし候事

一金助大坂出立致候二付 自分江勘ヶ由より届書差出候事

是ハ案文此方より今日遣ス  
○右之段今日夕方直様申遣し置候事

\*

同廿八日

一今日勘ヶ由御用先大坂表より書状到来 尤間清市郎

より町飛脚を以差越ス

八月十八日大坂表江着之由也 其頃も市野金助病同変(ママ) 二而是非とも大坂表より帰府致度存込候由申来

閏八月朔日

一今日為御礼登城之節 勘ヶ由方江御用状差出ス

尤江州膳所へ遣候事 御勘定所へ添書例文之通り也即御勘定組頭保田定市へ相渡置

一右之節秋山松之丞江面会 右市野金助帰府二付跡代役当春金助貞兵衛跡当分之内被仰附 下役下河辺政五郎と申者御用立可申聞差遣度候

夫二付 金助茂帰府之上西国御用御免願上其上二て右跡代り奉願哉之段承り合候処 不及其儀 勘解由より金助帰府届書差越次第 一所二右跡願書上候即可然段申聞候

且又金助義御證文被下置罷越間 此度奉願候政五郎江御證文被下候義と被存候 左候へハ金助御證文御引替二而も被成下候様 相願可申哉之段是又問合候処 是ハ御證文被下候様二而已願候ハ、上二而御取斗可有之候間何となく願候方然段被申聞候

同五日  
一今昼時勘解由御用先大坂より書状到来 尤間清市郎より町便り二而来ル

市野金助帰府之義申来即届書左之通

美濃紙半紙  
折掛 市野金助病氣二付帰府御届書  
伊能勘解由

のり入半切  
此度私測量御用為差添罷越候市野金助義当六月下旬より暑氣に相当り 次第二病氣相變 胸痛強 其上逆上下冷仕 別而左之足筋縮ミ歩行不自由二罷成候二付

紀州木本浦町醫師宮崎見□藥服用仕候而も  
追日胸痛強御座候間 又□同国田辺表安藤順輔醫師小川南叔葉相用猶又療養相加 其上私とも色々看病仕候得共 旅中故行届兼

追々病氣増 且躰瘦難儀仕 逆茂急々二ハ快氣シ程無覚束奉存候 尤右醫師とも茂其段申聞 只今之躰二てハ半分御用向可相勤躰無御座候

依之一先帰府仕 得と療養相加申度段 於紀州路金助義申聞候得共 辺部故彼是行届兼可申奉存候二付漸夕大坂表迄召連 去八月十八日着仕候

於当地茂醫師島田昌嚴葉相用候得共 是又急々二ハ快方仕兼可申段申聞候 依之当春御同濟之通一応帰府之上 療養為相加申度奉存候二付 明二十九日夕大坂表出立為仕申候 依之此段御届申上候 以上

八月廿八日  
高橋作左衛門殿  
伊能勘解由 印

右届書秋山松之壺宅江持参 是ハ明日早々差上可申奉存候 左候へハ此間被仰聞候通り 跡役願も明日一所二上ヶ可申候

右之節跡役之者江可被下御手当并旅御扶持方等 市野金助義先達而請取加二相成罷仕候へハ  
金助と相談二而日割を以相渡候様可仕答二可有之候へとも 何茂小身者之儀 殊二当春出立之節支度等二而余程相掛り候へハ 早速返納之義も無覚束 左候へハ跡代人出立も延引二相成候間

市野金助二拘わらず此度別段二御願候ても不苦候哉之段承り候処 其義ハ勿論之事二候間 何レ明日被致進達候願書へ先達而兩人江被下置候通 御證文御手当等被下置度段相願  
市野着後當時有合金返納致 残伺之上年賦二而も返納致候様取斗候方可然後 松之壺申聞候二付 明六日進達之積也

\*

同六日  
一左之進達もの御城江持参 秋山松之丞を以撰津守殿  
江上候事

(半紙上部書込み)

何茂のり入半切一通もの

此書面同十一日撰津守殿御下ヶ被成 金助御手当請取  
過之分月割を以返納可致旨 松之丞を以被御渡候  
即奉行付案文 松之丞被具候二付 直様相認 同人を  
以返上

書面金助義婦府仕候ハ、

御手当請取過之分返納為仕

可申旨被御渡奉畏候

閏八月十一日 高橋作左衛門

西国筋為測量御用 手附伊能勘解由江差添罷越候  
下役市野金助義病氣二付帰府之義申上候書付

高橋作左衛門

私手附下役

御先手

三宅助之丞組同心

市野金助

右者此度私手附伊能勘解由 西国筋為測量御用罷越候  
二付為差添被差遣 無滞御用相勤罷在候処 当六月下  
旬より於紀州路暑氣二相当り 次第二病氣相変 胸痛  
強其上逆上下冷仕 別而左之足縮ミ歩行不自由二罷成  
候二付

所々二而療養仕候得共旅中故行届兼 追々病氣増

且躰疲難儀仕 辻茂只今之躰二而ハ急々二快氣之程  
無覚束 当御用向可相勤躰無御座候 依之一先帰府仕  
得と療養相加申度断

於紀州路金助義勘ヶ由迄申聞候得共 辺鄙故彼是行  
届兼可申奉存候二付 漸ク大坂表迄召連 去ル八月十  
八日着仕候而 於同所茂彼是療養相加候得とも同変二  
而

急々二ハ快方仕兼可申断医師共申聞候二付 当春奉  
同置候通 一応帰府之上療養為相加申度奉存候二付右  
金助義去八月廿九日大坂表出立為仕申候段 昨五日勘  
解由より申越候

依之此段御届申上候 以上

閏

八月六日

高橋作左衛門

\*

私下役市野金助義病氣二付西国従御用先帰府仕候間  
下役壺人差遣申度段奉願候書付

高橋作左衛門

私手附下役

西丸御書院番

山口和泉守同心

下河辺政五郎

右者私手附伊能勘解由西国筋為測量御用差添罷越候  
市野金助義病氣二付帰府仕候故 御用先手足り不申御  
用向差支申候間 下役之内事馴候者壺人罷越候様仕度  
段勘解由方より申越候

依之下役之内右政五郎義 別而事馴 御用立可申者

二茂御座候間 此度右御用先江差遣申度奉存候 依之

此段奉願候 願之通被仰付被下候ハ、

番頭和泉守へも被仰渡可被下候 以上

丑

閏八月

高橋作左衛門

\*

私下役下河辺政五郎義 西国筋為測量御用被遣候得  
ハ御證文御手当等之儀奉願候書付

高橋作左衛門

私手附下役下河辺政五郎義 西国筋為測量御用伊能

勘解由江差添被遣候儀二罷成候ハ、此度勘ヶ由江差  
添罷越候下役兩人江被下候並之通 御手当等被下置候  
様奉願候

即取調候所 左之通二御座候

御證文

一 馬壹疋

一 旅御扶持方式人扶持一倍

一 雑用金壹ヶ月壹兩

一 賄道具代金貳歩

一 御手当銀一日壹匁五分

一 別段御手当壹ヶ月金壹兩三歩

右之通被下置候様奉願候 以上

丑

閏八月

高橋作左衛門

\*

同十日  
一 秋山より左之通申越ス

高橋作左衛門殿 御本丸

奥御右筆中

高橋作左衛門様 秋山松之丞

以手紙申進候 弥御安榮被成御座奉賀候 然ハ明日

御書付等御渡二可相成候様奉存候

\*

八月同十一日

一 昨日秋山より今日御城江罷出居候様申来候二付

登城

一 御老若御上り後 撰津守殿 秋山松之丞を以左之御

書付被成御渡候

高橋作左衛門江

西丸御書院番

山口和泉守同心

下河辺政五郎

右伊能勘解由先達而西国筋江相越 測量御用相勤候間  
罷越差添相勤候様申渡候 尤西丸御書院番頭可被談  
候

\*

高橋作左衛門江

西丸御書院番

山口和泉守同心

下河辺政五郎

旅扶持方二人扶持一倍

雜用金壹ヶ月壹兩

賄道具代金貳步

御手当銀一日壹匁五分

別段御手当一ヶ月金壹兩三歩

右西国筋其外国々測量為御用罷越候二付被下候御勤  
定奉行可被談候

\*

右式通共松之丞を以被成御渡候事 且又金助帰府御  
届書御下ヶ被成 金助帰府之上月割を以御手当等被下  
候間 請取過之分返納為仕可申旨 松之丞を以被  
仰渡候二付

奉り附致返上可致旨同人申聞候二付承り付 速刻同人  
を以返上 承り附前本文写江写附置

一 金助返納金之義 御勘定所二而追而致相談旨松之  
丞申聞候

一 御勘定前田平右衛門江面会致 此度手附下河辺政  
五郎義 金助跡御用被仰付候 右二付御手当取之義当  
春請取候手形之振合を以案分相認メ申候

是二而宜敷候ハ、明日切紙差上可申段申聞案分為見  
候事 尤当春請取候月数之通り 十七月分請取之積り  
申談候処

平右衛門申聞候ハ当春二月より十七月分御請取被成  
候ハ来寅五月迄二相当り候 左候ハ来寅五月二は  
猶又御請取之事故 此度十ヶ月分御請取候ハ、来寅五  
月まで二相当り候

其後來寅年当春御請取之残りも此度之残りも一同二  
御請取被成候ハ、手都合可宜存候 尤十七ヶ月分無  
之候而ハ当人出立支度等差支候趣二候ハ、致方無之間  
御勤弁之上 何連共可被成段 平右衛門申聞候二付

何連当人存寄承り候而 明日手付を以本紙差出可申  
旨段談置 勿論手形案分ハ存寄無之旨也 且又御扶持  
方手形案分ハ今日為見不申

明日本紙二而差出 存寄有之候ハ、本紙江加筆致具候  
様申談置

一 表御右筆組頭田中吉藏会度旨 小普請方部屋迄申来  
候二付 焼火之間江行面会致候処政五郎御證文案 内  
々為見候て是二て存寄無之哉之段申聞候故 政五郎頭  
之名面之御證文故 是ヲ省キ当春之通高橋作左衛門下  
役之御認メ可被下候

尤当春之御振合之通二而ハ存寄無之間 其通り御取  
斗有度段申談置 尤政五郎出立日限極り候ハ、其段申  
上 御證文幾日ニ御渡被下候様二と願候事故

其節吉藏迄申遣ス答二候事  
一 退出之節左之手札持参 摂津守殿江御礼と  
して罷越ス

私手附下役  
西丸御書院番  
山口和泉守同心  
下河辺政五郎

右手附伊能勘解由先達而西国筋江罷越 測量御用相勤  
罷在候間 罷越差添相勤可申旨被 仰渡△難有仕合奉  
存候 右御礼御請参上仕候

高橋作左衛門

右手札差急キ認メ候故右之通り也 以後ハ△此印之  
処ハ 且結構御手当等被下置 此文言書加へ可申候

\*

同十二日

一 今朝西丸御書院番頭山口和泉守より左之通申越ス

高橋作左衛門様

山口和泉守

以手紙令啓達候然ハ拙者同心下河辺政五郎儀 貴様  
手附伊能勘解由 先達而西国筋江相越 測量御用相勤  
候之間 罷越差添相勤候様可申渡旨 右為御用罷越候  
二付 銀式枚被下候段 昨日植村駿河守殿御書付を以  
被御渡候二付 則今朝政五郎江申渡候 且御書付写式  
通差進候

御落手可被成候 右可申述如斯御座候 以上

閏  
八月十二日

猶以右拝領物之義ハ貴様方江相渡候義二御座候哉否  
被仰聞可被下候 以上

西丸御書院番頭江  
山口和泉守同心  
下河辺政五郎

\*

西丸御書院番頭江

山口和泉守同心

右天文方高橋作左衛門手附伊能勘解由 先達而西国筋  
江相越測量御用相勤候間 罷越差添相勤候様可被申遣  
候

西丸御書院番頭江  
山口和泉守同心  
下河辺政五郎

西丸御書院番頭江

山口和泉守同心

銀式枚  
下河辺政五郎

西国筋江為御用罷越候二付被下之

\*

右御書付写式并手紙とも壹封二致来即右之通返書遣ス

山口和泉守様 高橋作左衛門

御手紙拝見仕候然は下河辺政五郎義私手附伊能勘解由先達而西国筋江相越測量御用相勤罷在候間 罷越差添相勤候様御申渡可被成旨右為御用罷越候二付銀式枚被下候段

昨十一日植村駿河守殿御書付を以被仰渡候二付今朝政五郎江御申渡可被成段承知仕候 且御書付写式通被差遣落手拜見仕留置申候 即私方江茂昨十一日撰津守殿御書付を以被仰渡候間写壺通差進申候 御落手可被下候 右御答如斯御座候以上

閏

八月十二日

猶以右拜領物之義 私方江相渡候義二御座候哉否可申上旨御端書之趣承知仕候

右は其御方二而御納戸頭江御掛合之上御請取可被成義と奉存候以上

右返事江昨日御渡之御書付写壺通差遣又 尤御手当御書付ハ不遺候事

\*

同十三日 登城

一去十一日御勘定前田平右衛門江談置候手形之義色々勘弁いたし候処 十ヶ月分二而ハ漸ク三拾五兩程二相成 内支度等二式拾兩余も入用

残拾五兩を以小者給金並び十ヶ月主従旅雑用二も相用候得は 中々不足も可有之二付御手当並御扶持方等十七ヶ月分之積り為相認

右之段申遣

翌十二日下河辺政五郎を以手形式通差出候処 平右衛門は非番故 手形掛り米倉四郎左衛門江 平右衛門江遣し候書状とも相渡候処 四郎左衛門申聞候は 至極御手状之趣御尤二存候へ共 当春十七ヶ月分御渡申此度跡より出立致候者江茂十七ヶ月分相渡候義 御勘

定所之規矩二も無之 且来春御請取之節都合も宜敷候間 何卒今一応御勘弁有度旨政五郎江申聞候上二而手形持返ル

旅費の支給は今も昔もやかましいようである。

右二付 今朝右手形持参四郎左衛門江面会 色々及相談 連茂十七ヶ月分無之候而ハ支度相成不申 出立も出来兼申候間 御渡被下度申聞候へ共 兎角十七ヶ月分相渡候儀不相成段四郎左衛門申聞候二付 左候ハ、連も致方無之御断二而も可差出候 左候ハ、御渡可被成哉之段申聞候処

御下知さへ有之候へハ如何程成共御渡可申段申聞候二付秋山松之亟江面会致 右之段申聞如何取斗可申哉と及相談候処 何レ伺見可申間暫相待候段申聞候二付願□二相待候処

景保が直接交渉しても無理。お断りが無くては無理だという。お断りの意味は、どうやら老中・若年寄の特別指示らしい。老中などを補佐する事務方の奥祐筆組頭の秋山に相談している。結局堀田撰津守に伺ってお断りを出すことになる。

御右筆中沢達之助 御勘定所江も掛合具候へ共 御断無之候而ハ難相済由二付 秋山松之亟撰津守殿へ伺日具候処 御断(ことわり)可差出旨二付 左之通り御断(ことわり) 達之助を以差上ル

尤右振合ハ 古川吉次郎内々直様清書致被具候是二而差出見可申 若不相済候ハ、書替可遣旨心節より申候二付 其差出ス

\*

高橋作左衛門

(書状丈夫書込ミ)

のり入半切二認メ見出し無之 一通ものすべて如此

月附の下名前なし 是は古川吉次郎取斗具候哉 役所振合如此も有と見へけり

私手附伊能勘解由并下役共西国筋為測量御用先達而出立仕候之節 諸雑用御手当并御扶持方等 当二月分より十七ヶ月分請取相渡罷越申候 然ル処此度手附下役下河辺政五郎義 勘ヶ由へ差添測量御用相勤可申旨被仰渡御手当并旅御扶持方等先達而下役兩人江被下候並之通被下置候間 当閏八月分より十七ヶ月分請取申度奉存候 此段御勘定奉行江御断可被下候 以上

閏 八月

右中沢達之助を以秋山江相渡 松之亟より撰津守殿へ被上候処 早速達之助を以 御勘定所江被成御下候 右二付早刻今朝より持参致居候印形式通 湯吞所同心を以米倉四郎左衛門江相渡 其時御老若御退出なり手形左之通

請取申金銀之事 一 合金四拾七兩壹分 銀七百五拾目

内 金拾七兩 雑用金 但一ヶ月金壹兩之積十七ヶ月分

金式分 賄道具代 銀七百五拾目 御手当 但一日銀壹匁五分之積 日数五百日分

金式拾九兩三分 別段御手当 但一ヶ月金壹兩三分之積十七ヶ月分

右は拙者手附下役下河辺政五郎義 西国筋其外国々為測量御用罷越候二付 諸雑用別段御手当書面之通請取申処仍如件 文化二年丑年閏八月

天文方

高橋作左衛門

倉地政之助殿

中山貞五郎殿

大島半左衛門殿

請取申旅御扶持方之事

米合拾石者 但京升也

但一日壹人五合 式人扶持一倍之積

日数五百日分

右は拙者手附下役下河辺政五郎義西国筋其外国々為  
測量御用罷越候二付 旅御扶持方書面之通請取申處仍  
如件

文化二年丑年閏八月 天文方

高橋作左衛門

杉嶋彦五郎殿

鎮目牧太殿

杉原四郎兵衛殿

高橋八郎右衛門殿

天野藤内殿

石渡彦太夫殿

蜂屋十郎右衛門殿

川窪七郎右衛門殿

玉井藤右衛門殿

牛窪直右衛門殿

右式通とも四郎左衛門江相渡ス 尤本日御扶持方自  
分印斗二御請取候へとも旅御扶持方ハ臨時二而向後不  
請取且何ヶ月分も一同二請取事ゆへ御金之通御勘定  
奉行裏書有之候例なり

\*

一 下河辺政五郎義御用被仰付候段勘ヶ由江申遣ス二  
付今日書狀御勘定米倉四郎左衛門江相頼 掛リ之者江  
相渡呉候様頼置添書付左之通

手附伊能勘解由方へ御用状壹封差遣申度候間 此壹  
封江州彦根迄御遣有之候様仕度奉存候 以上

閏  
八月十三日

高橋作左衛門

御勘定所

\*

大阪逗留中取扱并同所町内測量順 且金助府之節  
取斗方 勢州曆師へ之礼状其外御用先触等写差越ス  
左之通 曆師へ礼状左之通

以切紙令啓達候 秋冷催候処弥御無口珍重存候 然  
は先達而伊能勘ヶ由高橋善助并拙者共 為測量御用其  
地通行之砌 彼是預心配馳走 殊二日々案内  
有之候二付 其地測量御用無滞相濟此節大坂表迄致安  
着 兩人之衆も被致大慶拙者共より宜敷申進候様被申  
候 為其以飛札申入候 以上

八月廿五日

坂部貞兵衛

市野金助

勢州 曆師中

右表向之礼状也 猶又勢州にて罷出世話致候曆師共  
江内々厚く礼申遣ス 即左之通

以手紙致啓上候 追日秋冷相催候処弥御障珍重存  
候 然は先達而中は勘解由善助并拙者共 内弟子等  
大勢相越候処 逗留中段々預御取持 御用向茂無滞相  
濟 殊二出立之時分茂色々預餞別 將又鳥羽表迄見送  
リ等被致彼是心配之段忝次第存候

鳥羽表も五月十日二出立以後海辺巖石等二而測量道  
筋甚悪敷 且入湖等も所々多く折節梅雨二而間々致逗  
留 志州領も存之外手間取 極暑二到り紀州熊野浦致  
通行処 是は志州よりハ別而難所二而漸ク此節大坂表  
江致安着候 右之仕合故挨拶等之書状も及延引候  
此段御用捨可給候 乍慮外同席中一統江可然様頼入  
候 右申述度乍旅中早々如此候 以上

八月廿五日

坂部貞兵衛  
市野金助

山口右兵衛殿  
箕曲主水殿  
佐藤伊織殿  
箕曲主膳殿

尚々先達而其地出立 鳥羽表江相越候後 江戸表江  
書狀被差出候由 同役共より申越致承知入念之至二候  
已上

右之段申遣候由市野金助大坂表より帰府先触泊触  
金助宿所附左之通 尤御證文写差添遣候由

覚

御證文之内

一 馬一疋

外賃人足式人

右は我等儀国々測量為御用 今般大坂表迄相越候処  
未御用不相濟候へ共病氣二付大坂より致帰府候間  
明廿九日夕上下三人大坂出立淀川通乗船二て伏見へ  
出 直二大津宿江相越夫より木曾路中山道通り相越候  
条 書面之通人馬差出無滞荷物継立尤渡船等有之場所  
ハ前宿より申合差支無之様取斗可被申候  
且別紙之通休泊宿用意いたし 差支無之様 尤賄方  
之儀ハ御定之木錢米代相払候間 所有合之品二而一汁  
一菜之外馳走ヶ間敷義決而被致間敷候即御證文写相添  
差遣候間 此先触早々順達 留リ板橋宿より左之処附  
之通我等宿所江無相違可被相届候 以上

天文方

高橋作左衛門手附下役

市野金助印

八月廿八日

大坂より  
伏見通り  
大津夫より  
木曾路中山道通り

板橋宿迄  
右宿ヤ  
問屋  
年寄 中

所附

江戸山之手小石川伝通院前通り御先手三宅助之允組屋敷 切支丹坂上通り辻番所より八軒目市野卯之吉方二同居

市野金助

休泊附

八月晦日 朝 伏見  
泊 大津

一 八月十八日朝 堺出立

街道海辺両手分  
街道は伊能勘ヶ由 高橋善助 内弟子式人。堺より住吉社前通り大坂長町入口迄測り 夫より旅宿へ八つ時以前二着

海辺八坂部貞兵衛 内弟子式人 堺浜より堤通り津宮新田二従ひ木津川渡り 千嶋新田二而止ル

但シ三軒屋迄ハ可測処 街道と違ひ道屈曲 其上里数も余程有之 堺より大坂迄三里之処 海辺二而ハ四里半余有之 大坂着時刻遅滞二付 右之通千嶋新田二而止ル 夫より大坂旅宿夕七つ時頃着

一 両手共大坂斎藤町旅宿江着 直様月番西町奉行 佐久間備後守御役宅江伊能勘解由并坂部貞兵衛兩人為届罷出

但町奉行江出候儀勘解由斗罷出候而宜敷旨此方より先達而申遣置候へ共 勘ヶ由義不案内且逗留中度々用事も可有之候間 貞兵衛召連兩人二而 罷出候由

然ル処奉行所用人申聞候ハ 善助金助ハ未着無之哉之段申聞候二付 兩人も着いたし上下拾四人不残 着候得共 善助義は勘ヶ由相兼 金助義ハ病氣之趣相答候処 病氣二もせよ着二候ハ、届之名前書入可然旨申

聞候二付

左之手形取次之者相談二而差出候由

奉行の家臣である用人からうるさいことを言われている。

天文方

高橋作左衛門手附手伝 伊能勘解由

高橋作左衛門弟

高橋善助

天文方手附下役

市野金助

同

坂部貞兵衛

西国筋測量為御用 今十八日当地着仕候 依之此段御届申上候 以上

八月十八日  
(右ノ上部書入レ)

金助 貞兵衛

かた書 天文方

手附下役と認メ

候義ハ御證文

二従ひ候故なるへし

右届書之趣御城代江町奉行より相届 夫より江戸表江申上二相成候由噂有之由なり

大阪城代へ町奉行から届け、城代から江戸に報告とは何とおおげさなことか。それで奉行の家臣がしくくチエツクか。

―読後感―

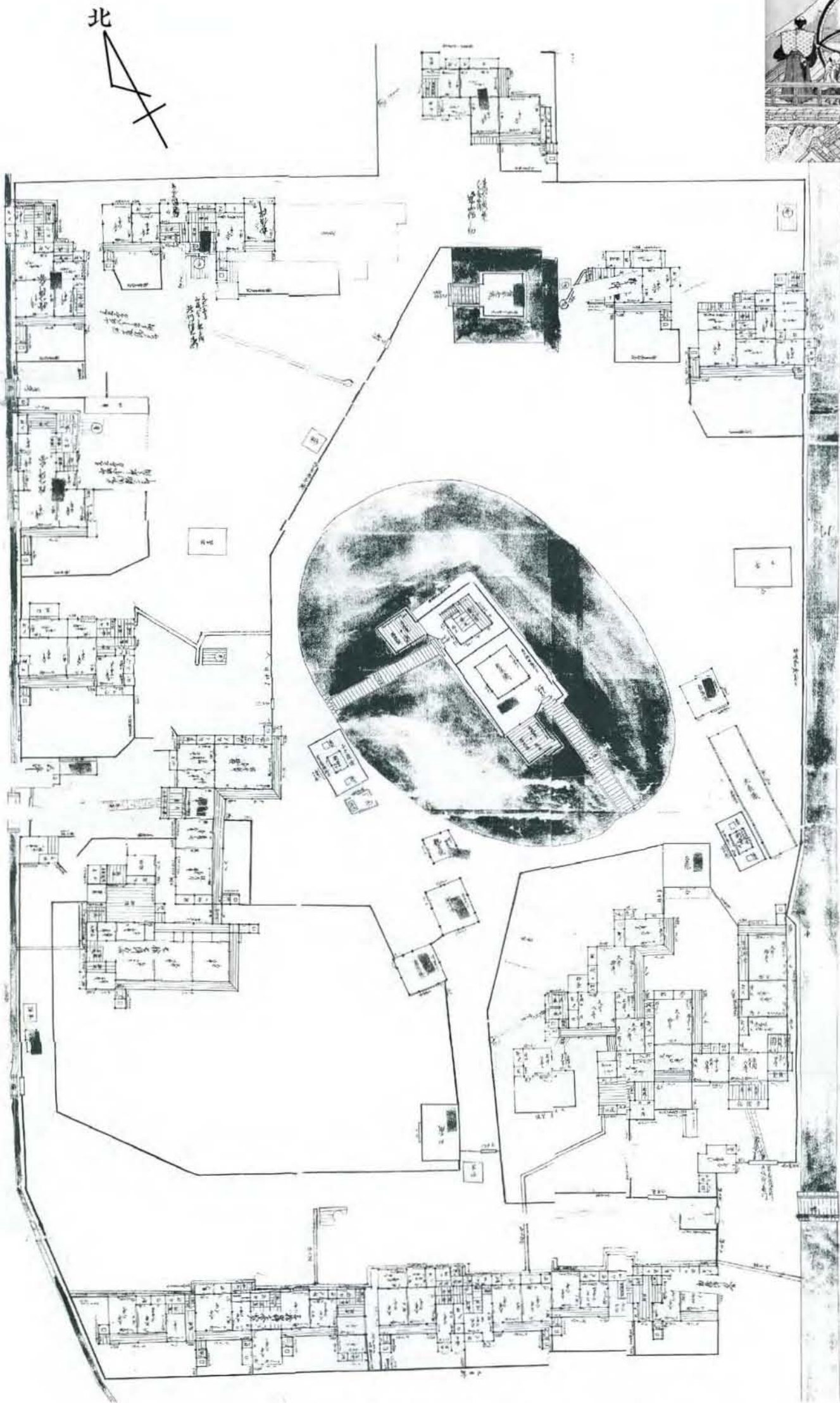
幕府官僚組織の手續きは、なかなか大変なのがよくわかる。二〇歳を過ぎたばかりの高橋景保は、そのなかを、ひたすらかきわけて、伊能隊の支援を続けてお

り有能な事務官僚でもあったようだ。追加派遣する隊員の支度金を確保するため、旅費を同じように払ってくれとか、なかなか頑張っている。奥祐筆組頭の松山が、若年寄堀田摂津守との間を取り持って、天の声をふらせている。伊能隊の上級司令部としての堀田、松山、高橋の三人の働きは大変大きそうだ。幕府の内部組織はしっかりと測量を支えていたようである。読みにくいでしょうがお続けください。(W)





葛飾北斎「鳥越の不二」



浅草天文屋敷図 (元会員 萩原哲夫 氏 提供)



伊能測量現地史料紹介⑨  
長州藩毛利家の伊能測量記録(二)

河島悦子  
鈴木純子  
伊藤栄子  
渡辺一郎

山口県文書館蔵毛利文庫 諸事小々之控 三百六十八

文化三年四月

請求番号三二一九(四九一五)

史料のあらすじ

長州領の測量が始まった時期に、江戸の長州藩邸に薩摩藩江戸藩邸から、伊能測量にどのように対応したか問い合わせがあった。本史料はその問い合わせ内容と回答を記した文書である。

国元に問い合わせ、お返事をいただきたいとあり、江戸藩邸に聞いても、わからないことを承知の上で聞いている。正式に問い合わせをおこうということかも知れない。

回答する方も、実態を抑えて、余り大騒ぎをしたと思われぬような返事をしている。薩摩藩が長州藩の動きを気にしていたところが面白い。面倒な部分は飛ばして眺めてほしいと思う。

村方同士の聞き合いは率直で、事実は全て伝えられ、経費も明らかであるが、藩相互となると、こんなことにも面子が、からんだらしい。

最後の方に、忠敬発病の際の長州藩の対応の様子が出てくるが、これは、今まで知られていない事実である。

天文方高橋作左衛門殿手付伊能解ケ由、其外測量御用として諸国順廻二付、松平薩摩守様衆より御会釈等の儀、問来二付、御答相成候事

付り 御國中測量相済候事

一、諸国測量御用として天文方高橋作左衛門殿手付伊能解ケ由、作左衛門弟高橋善助其外順廻之段、去文化式丑春公儀より御達之趣二付、未御在府中文化三寅正月廿日、松平薩摩守様衆より、御國中通行之節御会釈之儀回来候由にて公儀人中より書面差出候処、

於御国御沙汰相成儀二付、同二月廿二日之書札を以御国安里七郎兵衛、飯田孫兵衛(地方御右筆)へ佐世新右衛門、長谷川甚平(御用所御右筆より)申越候者、松平薩摩守様衆より天文方測量御用として被差廻候伊能解ケ由其外へ於御國中御会釈其外之儀回来候処、廉々於爰元難相成候故、別紙写相調差越申候間、御答之振仰知可被下候

薩摩藩家中から「伊能隊が長州藩の領国内を通行された際、どのように対応したか」について問い合わせがあったが、江戸では分からないので、別紙に、質問項目を送りますので、お答えください。

尤右御会釈旁之儀は御近国之様子聞合被仰付、御沙汰相成候様二と去三月御旅中より被仰越、其御僉儀も相成たるにて可有御座候へ共、若御國中順廻無之内は悉ク御答不被相成候趣も御座候ハ、先相知候廉計被仰知、其余は廻量差掛り御僉儀相極候上被仰越可被下候

測量への対応については、近国の様子を聞き合わせて対処するよう、参勤途中の殿様から御指示が出ていることでもあり、詮議もお済みと思えますが、巡回が始まらなくては答えられない分もあるでしょう。

分かっている分だけでもお知らせください。その他は後ほどお願いします。

左候ハ、其趣を以薩州様衆へ御答相成候て可有御座候 右之趣得御意候様、い賀殿(伊賀)被申付如此

御座候段申遣候処、四月廿四日の由を以、別紙旁委曲致承知豊前殿へ申達候

測量御役人方、此内御國中引移、追々測量相成申候御引受之趣、先達て備前衆猶芸州をも写様御成都合同様の儀二付、御國中之儀も右二準し引受相成候

測量役人方は、この間、国内に移り測量を始められました。対応は、備前、芸州と同様な形で引き受けております。

芸州より聞合之廉々答へ筋、別紙相調差登申候間、御見合之上宜様、可被成御取計候 聞合計二ても半途之訳有之、御答致延引候 端書二右御役人方過ル六日御国引移、後日熊毛辺測量相成申候 為御心得申進候由申来候付、猶また詮議之上別紙(左二記ス) 朱書之通御答相成候付、

芸州からの聞合いの内容と対応を別紙に整えましたので、ご覧の上よろしくお取り扱ひ願います。聞合いは六日に入国、熊毛辺の測量を終わりましたと報告があったので、なお、詮議して別紙朱書きのとおり答えました。

同年御帰国御旅中五月七日之書状を以、江戸御留守相津茂左衛門(御勤役方役)へ高橋小左衛門(伊賀手差役) 佐世新右衛門(御用所御右筆)より申遣候は測量御用として天文方伊能解ケ由殿其外諸国順廻二付、御國中通行之節御会釈之儀、松平薩摩守様衆より回来候由にて別紙一通当正月廿日篠川六兵衛より差出候

然処、右書面之趣ハいつれも地方にて無之候間ハ不相知儀二付、聞合相成別紙之通申来候付、例両通差越申候間、右之趣を以、答相成候様御取計可被成候 此段得御意候様い賀(伊賀)殿被申事二御座候 端書を以解ケ由殿其外四月六日御國中御引移、同廿四



『諸事小々之控』の原文書（山口県文書館蔵）

天文方高橋作左衛門殿  
 伊能解ケ由  
 手附

天文方 高橋作左衛門殿

手附

伊能解ケ由

右作左衛門殿弟

高橋善介（ママ）

右外略ス

右は天文方測量為御用諸国被相廻候旨、去春被仰渡御座候 其御許様御領内へは最早被相越候儀二ても御座候哉

右付、左条之趣御取扱振り御内々承知仕度奉存候 若又御当地二て相分り兼候儀も候ハ、乍御六ヶ敷御国元へ御向合被下、何分被仰知被下候様奉存候

一、御領内へ他御領より被差入候砌又は御城下拵（へん）へ被相越候節は 其御許様より一通り御使者二ても被差遣候哉 無左候ハ、御役人様方より之御相（挨拶）二ても被仰遣可哉之事

御答

他御領より此御方御領へ被引移候砌、猶御城下拵（へん）へ被相越候節も御使者勤、且役人共

より挨拶等申遣候様之儀無御座候

尤御城下並在方二ても其向引受之役人とも宿見

合をハ仕趣ニ御座候

（朱記の部分は原文も朱筆、以下同じ）

藩士は挨拶に出していない。村役人に任せていると答えているが、徳山毛利の例では、代官が下役を引き連れて挨拶に出ている。大仰に言いたくなかったのだろう。

一、右同断之節は御吸物、御酒等二ても被差出候儀二御座候哉之事

御答 右同断之節各別御会釈之儀無御座候

一、御領内逗留中旅込賄等之儀は自分払之儀二も御座候哉 又は御領主様より御手当等有之候哉之事 但 御手当有之候付ては上中下之御差別も御座候哉 此儀も承知仕度御座候

御答

御領内滞留中旅込賄等之儀は、払方有之候へは受取を請候様とハ不仕候 但賄之儀は上下無之一汁三菜由ニ御座候

際に料理品数を増やすのはよくあった。

これはその通りだった。

一、御領内日々致測量相廻候二付ては昼休所等有之其所二て昼飯二ても御手当等御座候哉、又は弁当二ても用意有之候哉之事

御答

日々測量相廻候付て昼休所用意相成、昼飯猶弁当等の仕出有之趣ニ御座候

これもその通り。

一、御領内村々不残都て被相廻事候哉、又は海辺並河辺等有之候場所迄二て相済候哉之事

但 御領内へ島々相付居候へハ島々迄も不残相廻候哉於其儀は、乗船御取仕立方等之儀迄も承知仕度御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

但 島々へは被相越候付、乗船之儀は、通ひ船、小早舟等用意相成、其外獵船等数艘入用之趣ニ御座候

御答

御領内村々不残被相廻二てハ無之、海辺測量相成趣ニ御座候

書面の趣、承知いたしました。別紙のとおり回答がすみましましたので、ご報告お願いたします。

五月十三日之返を以御両書之趣致承知、其元より被差越候別紙之通答相成相済申候間、左様可被成御承知候 此段伊賀殿へ程克被仰上候様二と存候由申来候事

参勤から帰国途中の殿様から、同趣旨の指示が出ている。念押しであろう。

日より次は熊毛辺測量相成趣二候由申来候 若聞合有之候ハ、右之考を以御答可被成段申遣候處、

右同断之節各別御会釈之儀無御座候

右同断之節各別御会釈之儀無御座候

右同断之節各別御会釈之儀無御座候

右同断之節各別御会釈之儀無御座候

右同断之節各別御会釈之儀無御座候

右同断之節各別御会釈之儀無御座候

そのとおりだが、船用意をえらく簡単に記している。船集めは大作業だった筈。

一、御領内海辺致測量候節陸地被相廻候哉 船にて磯辺へ被相廻候哉之事

御答

海辺測量之儀手分にて陸地、猶船にて磯辺を被相廻候儀も有之候由

とおりの回答だ。

一、御領内之絵図面致所持居、時々郡村等二引合又は乱方等之儀委敷御座候哉之事

御答

絵図之儀は被相廻候所々にて相調差出候 乱方之儀委敷様子二相聞申候

そのとおりだった。

右之通御内々承知仕度御座候 以上

正月

付り 御國中測量相済候事

一、天文方高橋作左衛門殿手附伊能解ケ由、作左衛門殿弟高橋善介下役坂部貞兵衛、下河辺政五郎、内弟子平山郡蔵、伊能周蔵、尾形頭次郎、門倉隼太、長沢勝次郎、小坂勘平、佐藤伊兵衛、

測量為御用四月四日、芸州より岩国へ引移、海辺測量相成、同七日大島郡へ引移、四手分ケにして海辺島々共二相量、同十五日より上ノ関、同十九日より熊毛、同廿日ヨリ都濃(つの)郡、同廿三日迄二追々徳山御領へ引移、

同廿六日より又々都濃郡戸田(へた)村、同廿八日徳山御領留(富)田(とんだ)村、同廿六日より三田尻(みたじり)手分にして(追々罷越候間、同様前後

仕候)

同廿九日より小郡(おごおり)、五月二日ヨリ船木、同三日より吉田、同六日まで長府清末(きよすえ)御領へ引移、

同九日、十日 赤間関、伊崎新地測量相成、同十六日より追々先大津へ引移、廿四日迄二追々前大津へ引移、坂部貞兵衛一手島々致測量候分、同日瀬戸崎より萩浜崎へ引移、

同廿六日見島へ渡海相成候 残り一途(カ) 廿六日浜崎へ引移、翌廿七日二手にして一手は倉江辺、一手は浜崎より海辺通り御城山磯通り相量、

尤目印之昇書ハ船へ立置、所々磯へ上り深野町渡し場迄測量いたし、夫より玉江にて一所相成、同所より川縁り相量、平安古河岸端竹本源之允前揚陸同前より河岸通り両片川より

目印の幟を船に立てておいたという話は珍しい。

夫より本町通り田町清光寺角迄相量、夫より二手にして一手は唐樋(からひ)より椿町迄、一手ハ清光寺前より熊谷町通り浜崎旅宿へ引取申候

同廿八日、廿九日越ヶ浜迄、当沖島々測量相成見島之一手も帰帆仕、当月朔日徳山御領奈古(なご)へ引移、同二日より奥阿武郡引移、同六日迄二追々不残石州方へ引移相成、御國中海辺島々共二無差障通行相済候段、所々御代官中、町奉行よりも届出候

一、上筋より之順達之趣を以通路筋村々石高並寺社家数人数付等、庄屋、年寄共より之書上ケにして差出、猶絵図をも相調差出候

一、御國中もあしらへ向之儀、備前安芸御引請之趣、聞繕仕せ候処、御使者御音物等も無之由、其外ハ区々にて各別入御念候廉も無之、都合ハ長崎御晋請役など

通行之振相之由相聞候付、御國中二ても上より之御会釈をハ不被仰付、賄之儀ハ上筋之振を請、一汁三菜之旅籠仕出、酒菓子等も差出候処、米代木銭として少々宛払方相成候由

長州領でのお扱いについては、備前、安芸などの様子を聞きましたが、御使者、御音物を出しておらず、格別入念ということはなく、長崎に往來する幕府普請役の通行に準じてということでしたので、お上からの会釈は仰せつけられませんでした。

賄いは、上方の扱いと同じ一汁三采の旅宿の食事に酒、菓子などだしました。米代、木銭を少々いただきました。

この辺は全く建前の記述で事実と相違しています。使者は出していないませんが、食事・宿舎には大いに気を使いました。

一、乗船之儀は備前にてハ御手船ハ不被差出由相聞申候処、芸州にてハ函船等差出候由、右二付御國中之儀も大島郡上ノ関兼て御差廻置候御勤之通い船差出、其余ハ所有相之船にて相済せ、三田尻にては通い四艘小早船等差出候処、夫より至北浦二候ては口津にて乗方不弁理之趣申入、通い船をハ老艘差廻、其余は荷船、漁船等差出、且浜崎にては御通老艘 致用意差出候

乗船については、備前では藩船は差し出さず、安芸では大型藩船を出したとのこと、長州では上関にかねて差し回しておいた参勤用の船を差出し、その他はその所あり合わせの船で済ませ、三田尻では通い船四艘小早船を差出し、また北浦、浜崎では通い船一艘出しました。

ここでも軽く記しているが、徳山藩では測量隊到着前に船止めをして、延べ数百艘の船を提供している。その所、有り合わせの船などという規模ではなかった。

一、才判別居相之役人壹人宛付廻り仕せ候 右之通御  
國中無滞測量相済申候

但伊能解ケ由小郡才判秋穂(あいお)浦ヨリ気分相二  
て先月三日、船木才判藤曲浦へ俄二止宿相成候処、風  
邪駈々(しかじか)無之其上数日之気労相見候由二  
気遣敷容体之由、

忠敬が秋穂浦から気分悪くて、先月三日藤曲浦へ、  
にわかにお泊まりとなった。風邪ということでしたが、  
たいしたことは無いが、数日の気苦労で気がかりな容  
体とのことでした。

同日船木より注進有之候付、早速栗山孝庵事差出  
候処、気分快方二て同日朝藤曲浦出立、吉田才判性生  
浦被罷越候二付、孝庵儀も同日性生罷越、御代官役  
を以当役中より見廻、猶孝庵差越候段、一応申入仕せ  
其後孝庵罷越見合仕候処、

四日に船木から注進があったので、藩医栗山孝庵を  
見舞いにだしたが、よくなって五日に藤曲浦を出立、  
吉田宰判の性生浦に向かったという。  
孝庵も追いかけて同六日性生浦にゆき、御代官役か  
ら見廻りを出し、藩医栗山孝庵が到着した旨申し入れ  
て見舞いに出ました。

前より性生浦着之砌は寒熱等有之 駈々無之由二候処、  
六日より亦々快、病症痰(カ)と相見候由、孝庵見  
合候節も弥快、気遣敷儀も無之、  
同日赤間関(あかまがせき)被罷越候由、尤孝庵事態  
々被差出候段 有難奉存候て罷帰候上、御礼宜申具候  
様 挨拶有之候由、

性生浦到着のときは熱がありました、たいしたこと  
とは無くて、六日より亦々快復しました。病気の症

状は痰(カ)と思われませんが、孝庵が見舞ったときは  
回復しており、気遣わしい点もありませんでした。

同日赤間関(あかまがせき)へ行かれるとのこと、  
孝庵を態々遣わしていただいたこと、ありがとう御座  
います。御礼申し上げてくださいとのことでした。

且又孝庵儀ハ赤間関まで付添可罷越段申入候処、達て  
御断候付直様罷帰候

孝庵は赤間関まで付き添いましよと申し入れまし  
たが、たつてお断りになったので、立ち戻りました。

然処其後も全快二ては無御座由、一向測量も不致赤間  
関両大津二ても少々宛滞留有之候付、所々二て地下医  
見合、服薬等相成候由

しかしながら、その後も全快ではなくて、一向測量  
もされず、赤間関、両大津でも少しづつ滞在され、所  
々で地元の医者に診せ、服薬されたとのこと。

一、先廿六日世戸崎より船二て浜崎引移候付、着早速  
御代官役を以当役中より見廻、猶栗山孝庵御見合披仰  
付候様申入仕せ候処、段々御念入候段挨拶有之、其後  
孝庵罷越滞留中も日々見合薬をも所望有之差出候由、  
気分相都合各別も無之少々之出来不出来有之候へ共、  
強て気遣敷儀は無之由

廿六日に世戸崎から船で浜崎へ移られたので、早速  
付き添い役人を通じて、栗山孝庵に診察を仰せつけら  
れるよう申入させました。御念が入ってありがたいと  
挨拶があつて、孝庵が罷越し滞留中、毎日診察し、お  
薬も希望でしたので差し上げました。気分は各別のこ  
とも無く、少々いい悪いはあるけれど気遣わしいこと  
は無いとのことでした。

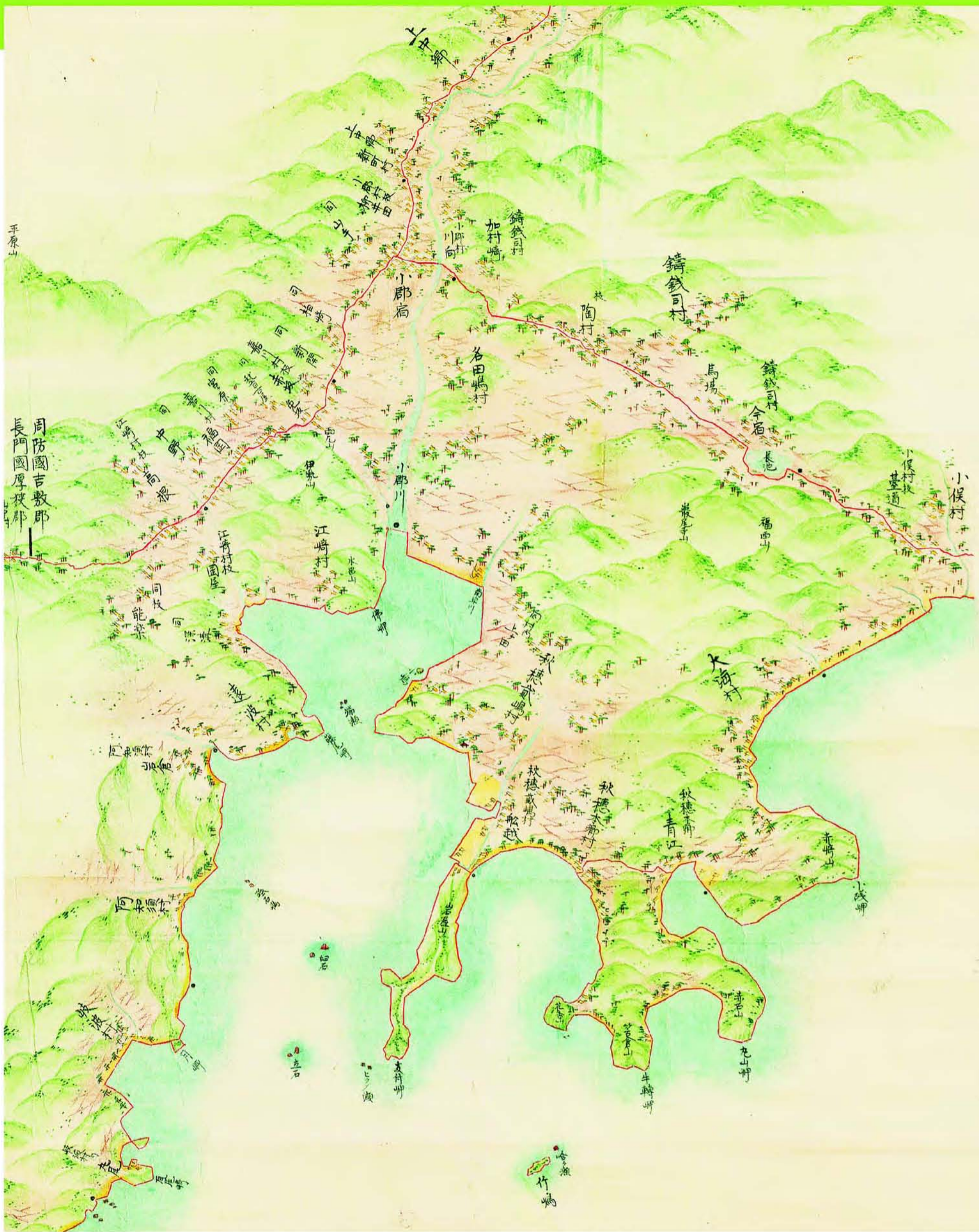
然処過ル朔日爰元出立二付、前晚猶又御代官役を以  
当役中より之見廻、猶保養方之儀無用捨被申出候様申  
入候処、

重畳御念入之由、内弟子を以挨拶有之 孝庵儀は数  
日之跡罷越見合候処、各別之相替儀も無之、丸薬等相  
調差出置候由、旁 村上九郎右衛門、孝庵よりも申出  
候事

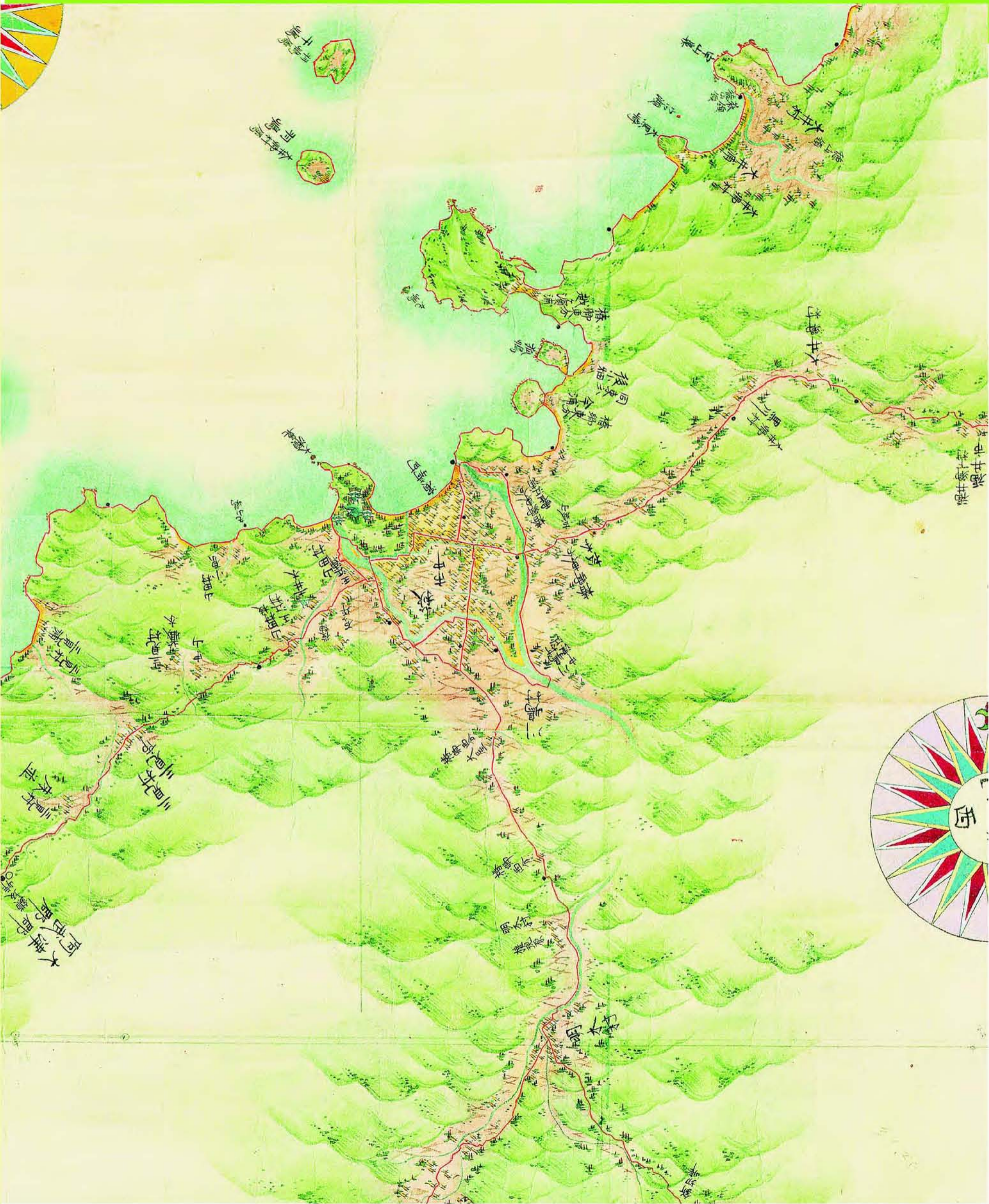
ところが、一日に当地出發とのこと、付きまわり  
役人から前晩に、保養については遠慮なくお申し出ら  
れるよう(ゆっくり滞在されては?)申し入れました  
が、ご丁寧にありがとうと内弟子経由で御挨拶があり  
ました。

孝庵は、数日あとまた伺いましたが、各別変わった  
ところもなく、丸薬等を調べて差出しておいたと、村  
上九郎右衛門、孝庵から申し出がありました。

栗山孝庵(くりやまこうあん) ウィキペディア  
によると、長州藩主の侍医で、日本で二番目に男性の  
腑分けを行い、また初めての女性の腑分けを行ったと  
されているが、生没年が合わない(享保一六年(1  
731)―寛政三(1791))。 忠敬の見舞いに  
出たのは、後世代の医師と思われるが、一流医師だっ  
たことは間違いないだろう。



周防國吉敷郡  
長門國厚狭郡



随想  
「香取の日記」の頃

伊能楯雄

吾家の古文庫の中から「楯取日記」と表紙書きされた小冊子を見つけた。そして、その裏表紙の内側には次のようにしるされていた。

明治二十四年六月十八日といとこなりける永澤が行きしに、そが家にある古き文ともあまたとり出て見せられるうち香取日記てうものを見出した。こは潮来なる窪谷せや子の草にして、そがおしひの帥橋千蔭、平の春海二柱の大人の香取鹿島海上行紀行にてわがまだしらぬ名前其頃ほひに名ある歌人にてつばらにあかせし巻にぞありける。ただ見てやまんことの口おしければ息吹きいかでかを力草老のすさみにうつしものせし。

大船の香取か浦の浪枕なみなみならずみてし人はも

明治二十四年六月二十日謄写す

七十一翁  
伊能恵迪書

伊能恵迪は、私の曾祖父であり、その父俊則（養子）の実家は永澤忠右衛門家、窪谷せや子の実家でもあり、俊則はせや子の甥にあたる。

せや子の父は伊能七左衛門清茂の長男、母は永澤治郎右衛門征俊（永澤本家）の長女である。

七左衛門清茂の妻は、伊能三郎右衛門長由（忠敬の養父）の妹であり、長由の死後、娘みちが成人するまでの十二年間、清茂夫妻が看房として三郎右衛門家に移り住み家業の差配をしていた。また、みちの最初の夫景茂は清茂夫妻の五男であり、三郎右衛門家危急の

時期を支えた人である。

（因みに、現在七左衛門家の佐原観福寺にある墓地は伊能忠敬研究会会員の伊能洋氏がお守りされており、亡き妻陽子さんが眠っておられる。）

景茂死去の後、忠敬が入婿するのであるが、其の子稲と景敬は、せや子とは、また従兄妹となる。稲、宝暦十三年、景敬、明和三年の生まれ。一方、せや子は宝暦十二年生まれ。後に潮来の窪谷庄兵衛家に嫁ぐが、二十六歳の時、夫を亡くし以降寡居し妙真と称した。

さて、吾が曾祖父の写しとった「香取の日記」は、寛政六年、橋千蔭によって書かれた佐原銚子方紀行文である。同年四月十八日から五月二日までの十四日間の、友人村田春海との旅行記であり、また詠草記でもある。

著者の橋千蔭は当時既に著名な歌人、国学者であり、また能書家でもあった。父の加藤直枝は江戸町奉行所の配下の与力で、賀茂真淵の弟子であり歌人である。真淵が京都から江戸に出てきた際の有力な後援者でもあった。千蔭も十歳で真淵門に入り師事した。父の跡を嗣ぎ与力となったが、五十四歳で職を辞している。国学者として「万葉集略解」を著し、また歌人としては流麗典雅な古今、新古今風の歌を詠じだして江戸風と称せられ、書道においては、佐理、行成風を慕って一家を成した。千蔭流と称され俳優、遊女などまでその書風を学んだという。

また、同行した平（村田）春海もまた著名な歌人、国学者である。父春通は、日本橋小舟町に干鯛屋と質両替店を営む富豪で、使用人数百人、また広大な屋敷をもっていた。江戸に上った賀茂真淵を千蔭の父直枝とともに支援し、自らも弟子となり、その子春海も十三歳の時入門した。

先輩の千蔭とともに優麗な江戸派の歌風をおこし、

また書もよくした。豪商の家に生まれその家業を継ぎ生活は豪奢を極めたが、重なる散財により家は破産し、その後は歌をおしえることを生業とする侘しい生活となった。

千蔭の助けもあり次第に門人も増え、歌人としての聞こえも高くなり、やがて松平定信の邸に招かれ殊遇を得て五人扶持を給せられるまでになったという。

千蔭、春海の今回の旅行は、この地の弟子達の招きを受けてのものであり、佐原の永澤躬国（窪谷せや子の従兄妹）の家に三日間、銚子の節之という人の家に六日間、途中の香取鹿島両神宮参詣などおよそ半月間の旅であった。

この年、千蔭六十歳、春海四十九歳、既に著名なこの二人の旅行記の中に、佐原伊能家にかかりをもつ三人の人物の名があらわれてくる。

四月二十八日銚子に

「正慶がしまねかる（中略）香取の伊能美之も海上へ来りて、はじめてたいめす、美之は、もと江戸の山川喜寛が子にて、いとわかかりしほどに香とりへ来たりて人の家をつぎつるよしかたる、秋になりなば江戸へ出て、ものとはんなどいへり、その夜も節之がりやどりたるに、美之より春海のもとへせうそす、ふみのはしに、

ふるさとおもへばおなしむさし野の  
草葉の露を哀とはミよ

とておのれへもことずてせり、春海かえし

今葉とてたちわかつともむさしの、  
草のゆかりをわすれまはしはヤ

その父、喜寛は歌このみて、おのれわかしりし時たいめしこともあれば、ただならずおぼえて、そのたよりに歌よみてやる、

かりがねのとわたる秋を今よりは  
待やわびなむみよしのの里」



永澤躬国の歌碑 躬国旧宅近くの小野川河畔に建つ

この伊能美之とは、佐原の伊能権之丞家の当主であり、江戸新材木町の名主山川吉左衛門家から婿入りした人で、その世話をしたのが楳取魚彦である。

魚彦は賀茂真淵門下にあつて、橘千蔭、村田春海らとともに四天王と称せられた人。また、佐原にあつては名主などを務める伊能茂左衛門家の当主である。その妻は権之丞家先代当主の妹であるので、美之は魚彦の義理の甥でもある。

美之の生年は不詳であるが、この時、およそ五十歳ほど、村田春海とは同年輩であり、春海の旧邸宅は小舟町で美之の実家とは目と鼻の先、さらにその親どうしは、真淵の門下にあつたことを考えると、春海と美之は昔見知った仲であつたとも想像してしまふ。

佐原に来て名主を勤めるまでになつた美之であつたが我儘な振る舞いも目立つようになり次第に衆望を失いつつあつた。日記が書かれた前年のこと、地頭所(津田家)知行所掛の渡邊清藏が佐原へ下向した際、

村中役人一同の前で、態度宜しからずとして叱責され大いに面目を失つたというようなこともあり、村田春海らとの銚子での再会について愚痴っぽい歌がでてきたのだろう。

それでも美之は、佐原において八十歳を超える長寿を全うし、佐原観福寺の墓所に眠っている。法名は花月院美雪晝夢居士という。彼にとって

その一生は夢の中だったかも知れない。

さてまた旅行記に戻る。

四月二十九日江戸への帰路、神崎の泊にて

「神崎へこぎのぼるころ日くれぬ、おなじくそこに舟よせし人は、香とりより江戸へのぼる人にて、伊能景明とはやくより歌などをしへつるいね子がせなるを、その人ともしらで、有りつるが、何くれとかたらひぬ・・・」

この伊能景明とは、忠敬の養子であり、今は江戸小網町一丁目の出店を任されている盛右衛門のことであり、いね子とは、勿論、忠敬の娘・稲である。

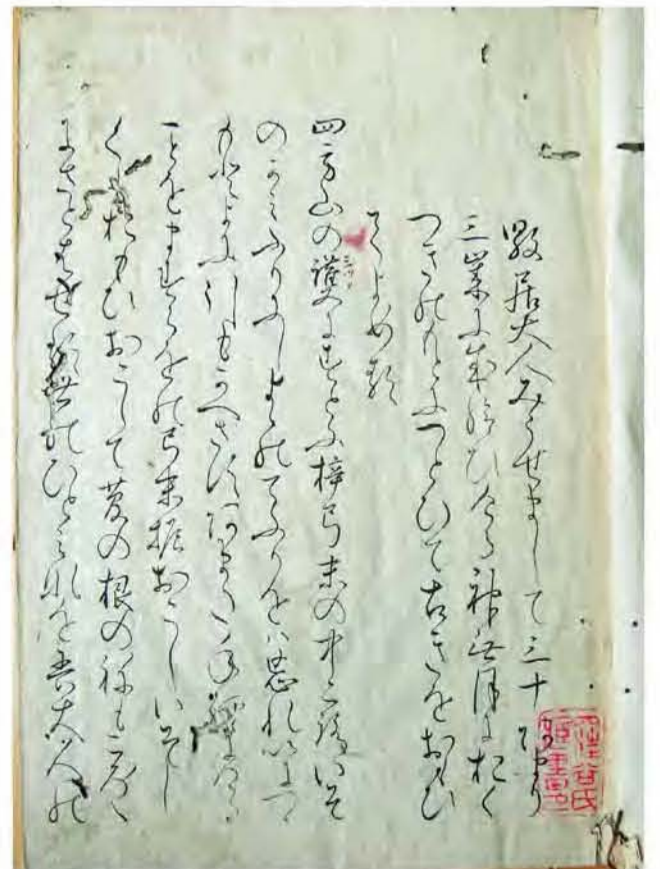
この記述により、稲がはやくより千蔭のもとで歌など習っていたことが判る。故小島一仁氏の説にしたがえば、盛右衛門と稲の結婚の時期は、安永七年(一七七八)以前であり、その後、小網町の出店をまかされるようになったとされている。

この頃、千蔭は町奉行所与力を勤めており、八丁堀の役宅に住んでいたと考えると、小網町の店とは日本橋川を挟んですぐ近く、江戸に出て早々に千蔭のもとで歌など習い始めたのだろう。

寛政六年は忠敬にとって大変忙しい年であつた。二月、荒地起し返し御見分の為、御勘定奉行柳生主膳正一行五十数名が佐原村に止宿、忠敬をはじめ村中役人あげての対応となつた。

一方、家内のことでは、(故安藤由紀子さんの伊能家文書紹介―お信さん―に寄れば)、晩春あるいは初夏の頃、忠敬は妻信に付き添って江戸にのぼり元大工町の桑原宅へ預け、暫くの間、小網町の店に逗留した後、七月初旬久しぶりに佐原へ帰ってきた。

十月、信が一旦佐原に帰る。同月、忠敬は再度の隠



窪谷せや子草紙『諸家雑詠』

居願いを地頭所に出すがかなわず。

閏十一月二日、信、病気を心配する桑原家の指図もあり江戸へ戻る。同月、盛右衛門から忠敬隠居の追願をだし、十二月に至り許されることとなる。

十二月十一日、長男景敬の妻となる常陸国菅谷村の横須賀勘兵衛の娘を連れ、盛右衛門と稲が佐原へ下向その夜、景敬と勘兵衛娘との婚姻が結すれば、併せて景敬が三郎右衛門を襲名し、忠敬は勘解由を名乗ることとなった。翌十二日、親類、村中役人等に披露した。

こうして寛政六年は暮れた。

(そして、翌七年五月、忠敬は江戸深川黒江町に居を構え高橋至時に入門することとなる。)

伊能稲、永澤(窪谷)せや子、永澤躬国の佐原の同年配の三人が、江戸に住む橘千蔭を師として歌や書を習っていたことが知れた。三人の師千蔭は賀茂真淵の門下にあつて、其の同門には佐原から出た楳取魚彦(本名 伊能茂左衛門景良)がいた。

景良は、忠敬より二十二歳年上である。幼い時から絵や俳諧を学び成長して学問を志し、賀茂真淵の門に



はいり、魚彦と称した。忠敬入夫の二年後、家を子に譲り江戸へ出て浜町山伏井戸の真淵の家近くに居を構え、六十三歳で亡くなるまで、ここに住んだ。

佐原の茂左衛門家（現在の伊能忠敬記念館の地）と忠敬の三郎右衛門家は、親族であり、居宅も橋を挟んだ真向かい側に位置している。二人は年も離れ、忠敬が入夫した二年後には、魚彦は江戸に出てしまっているが、学問を好む忠敬が、江戸にあって自ら選んだ国学の道を極めようとする魚彦に、少なからぬ影響を受けたことは確かであろうし、その生き方に憧れを抱いていたことであろう。

しかし、稲らの世代にあつては、魚彦は万葉集などの学問を中心とした著名の国学者であり、特に、真淵亡きあと諸大名はじめ高貴の方に講ずるまでになつており、一方、千蔭は、歌人としては古今、新古今風の江戸派と称された歌を詠じ、また書道においては、千蔭流と称しておおいにもてはやされていた。

同じ県門にあつても、魚彦の学問の道は一般に行われるというのではなく、やはり町民層には千蔭や春海が流行り、好まれた。愛娘を千蔭のもと習わせることにしたのは、魚彦にあこがれる忠敬だったのではないだろうか。

伊能家の江戸の出店は、盛右衛門と稲が暮らす小網町一丁目と其のすぐ隣の伊勢町には加納屋新兵衛が預かる店がある。また、同じ小網町二丁目には永澤家の出店がある。（この店は、忠敬の義父長由が米穀及び酒問屋を営んでいた所で、その後、従兄弟である永澤本家（当主征俊）に譲り渡されたものである。せや子と躬国は征俊の孫である。）

伊勢町の堀を挟んだ対岸の小舟町には、村田春海の旧邸宅、其の東の新材木町には、権之丞美之の実家・山川家がある。この外にも、江戸との地縁、人脈を持つ何人もの佐原の人達が身近に江戸の生活、文化に接し、それを享受していたのであろう。

寛政六年から二十二年経った文化十三年二月の「忠敬先生日記」に次のような記載がある。

「九日 曇 微雨 午後より雨止む 潮来妙真来る」

忠敬七十二歳、亡くなる二年前である。妙真とは、せや子のこと。亀島町忠敬の家である。

前日八日の夜、佐原から妙薫がきている。八月から十二月始めまでここを手伝い、暮、正月は佐原本家を守り、二か月ぶりに、亡き弟景敬の次男哲之助を伴い上つて来たところである。

妙真が訪ねてきた。

この時、妙真五十六歳、妙薫五十五歳

今は、ともに夫を亡くし、法名を名乗る二人である。

(終)

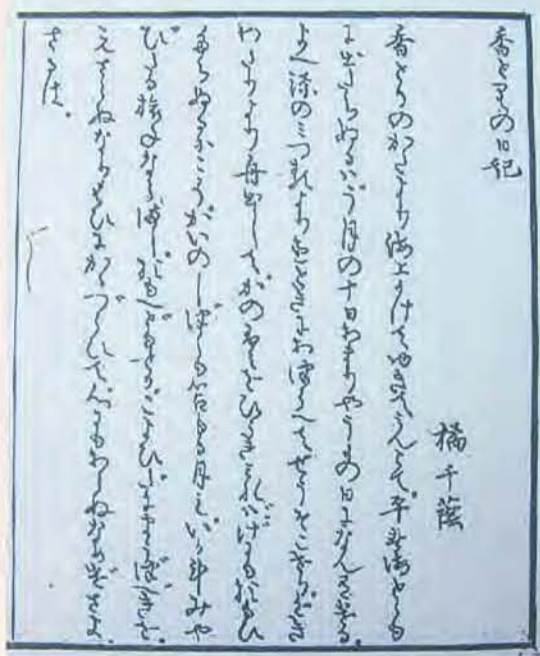
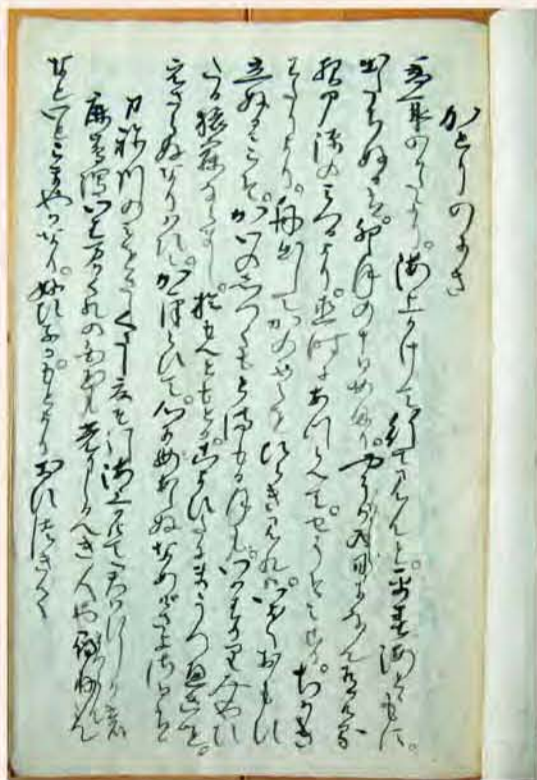
### 橋千蔭の『香とりの日記』は、

木版本として刊行されているが、この本と吾が曾祖父の写本を見比べてみると、処々に、漢字と仮名の使い分けの相違、木版本にはないが写本だけにある文言を見出すことができる。

このことにより、曾祖父の写本の元となつた窪谷せや子の草本は、木版本刊行前の稿本を写したものであることは間違いないであろう。一般に流布する前のもの、ましてや千蔭の自筆本であつたとすれば、曾祖父の写本も希少な資料であるかもしれない。

せや子の手になる「香とりの日記」の草本が現存しないのは残念であるが、吾家に数冊の窪谷せや子自筆の歌集などが残されており（前ページの写真参照）、その筆跡を見ると、千蔭に師事していたということも好く肯くことができる。

(伊能楯雄)



『香とりの日記』の写本（上）と木版本（右）

編集部注  
伊能楯雄さんは、伊能七家のひとつ、伊能七左衛門家の方で、伊能忠敬記念館職員、成田空港公団理事をおえられてから、伊能忠敬の家を五、六年ほど勤められた。家伝の文書から親戚関係、江戸との交流などをリアルに紹介していただいた。知らないことがあって驚いています。（編集部W）

# 忠敬旧宅雑録(三)

伊能 洋

今回は旧宅の敷地全体を眺めてみることにする。書齋と店舗以外の大きな建物では、文庫蔵、薪倉、倉庫、麴室、味噌・炭部屋、外風呂、離れなどが書齋を囲むように建てられていた。

土蔵造りの文庫蔵は忠敬遺品の大部分と、鏡櫃、長持、筆筒、船筆筒、箱膳(二十人前) 来客用夜具、書画、古書、大皿、高張提灯などが処狭しと積まれていたが、祖母孝は正確に物品の所在を把握していた。蔵には二十センチ程の門錠が付けられていて、用事の度に重い板戸の開け締めを行った。薄暗い蔵の中は小学生の私にとって全てが珍しく、不思議な異空間であった。

文庫蔵の右手、現在ロータリークラブの石碑が建てられている当りには、大きな薪倉があり束ねられた薪や枯松葉が山のように積まれていて、子ども達のかくれんぼには格好の遊び場だった。大八車なども置かれていて、戦争ごっここの戦車となり、大小の梯子は城壁となった。薪倉で遊んでいて叱られた記憶はないので、当時の大人は大目に見てくれたようである。

大八車と言えど大事なこと忘れていた。昭和十九年頃には、佐原でも艦載機のグラマンによる空襲が激しくなり、遺品の疎開を考えざるを得なくなった。頼む人手もなく、母多嘉子と当時東大生だった兄敬がこの大八車を曳いて、牧野の観福寺(三郎右衛門家菩提寺)、磯部の檜垣家、多古の平山家に分散して運搬したのである。今考えると喘息持ちで病弱だった母には、信じられない重労働だったと思うが、忠敬遺品を守るという一心が成した大事業だった。

文庫蔵の左手には、唯一の貴重な水源である円型の掘抜井戸があつて撥釣瓶が備えられていた。そう言えば車井戸は現在でも結構残されているが、ユニークな形をした撥釣瓶は地方に於いても殆ど見られなくなつたのは残念なことである。撥釣瓶は子どもでも楽に扱

えたので、台所や風呂への送水は私の仕事だった。井戸の横には木製ブリキ張りの升があり、そこに汲み入れると地下に埋められた竹の送水管を通して台所の大きな水甕と風呂桶に届く仕組みになっていた。この設備が何時頃考案されたのかは不明である。

なお風呂場は完全な外風呂で、一坪半ほどの瓦屋根の小屋であり、書齋の南西の角に置かれていたが江戸時代の屋敷図を見ても外風呂が書かれているので、火の用心を考えて内風呂にできなかったものだろうか。書齋からも台所からも下駄をはいて十数歩、雨の日には傘をさして五燭の裸電球の下がった風呂場に通った。祖母などは大どかなもので、夏の夕方には腰巻一枚で堂々と踏石を渡る情景が日常だった。

私の部屋だった東南角の六帖の前には、用水をはさんで二棟の倉庫が並び、左手のものは普段使わない家具や茶箱などがガラタタが積んであり、右側の物置には鍬、鋤、鎌、木槌、鉋、シャベル、天秤棒など一通りの農具が揃い、壁には菅笠、蓑、竹籠、箕などが掛けられて最低の自給自足の用意がされていた。

離れと呼ばれていた建物は旧記念館の南側にあり、八帖、六帖、二帖、台所、便所を持った瓦屋根の一軒屋で様々に使われていた。

戦前の旧家では親戚の学生や旅行者を寄宿させる事が普通で、伊能家にも佐原中学(現佐原高校)や佐原女学校に通う学生が常時寄宿していたが、祖母孝の面倒見の良さは格別だったようである。孝の妹、潮来の藤岡ます、掛崎の須賀田りつの孫たちも、学生時代を伊能家で過ごしたので未だに親しい付き合いをしている。書齋と離れの間には室(むろ)と呼んでいた石造りの小屋があり、めつたに入ることにはなかったが、麴、味噌、甘酒などが置かれていた。

書齋の南側を流れる幅一間ほどの用水は、昔は農業用水で樋橋(通称ジャージャー橋)を通り小野川を跨いで対岸に流れていた。石垣の間にはザリガニが顔を出し、春になると小鮒やタナゴが群れをなして上がったので、台所や風呂への送水は私の仕事だった。井戸の横には木製ブリキ張りの升があり、そこに汲み入れると地下に埋められた竹の送水管を通して台所の大きな水甕と風呂桶に届く仕組みになっていた。この設備が何時頃考案されたのかは不明である。



伊能洋氏 画

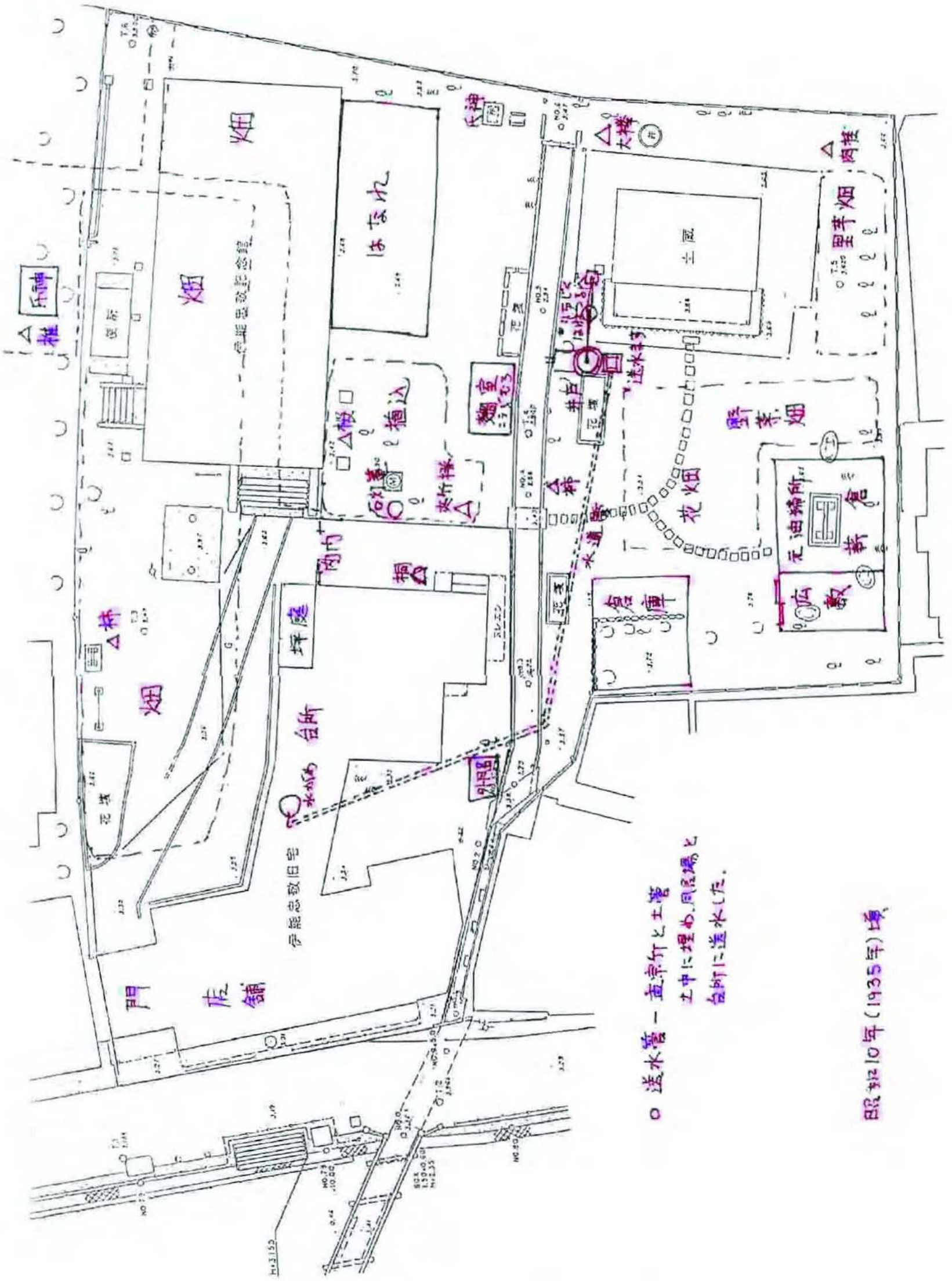
て来て私たちを喜ばせた。大盥を浮かべて舟遊びをしたこともなつかしい。現在も用水横に立っている柿の木は、当時から残っている樹木の数少ない一つである。氏神さまも忘れてはいけぬ。左隣の佐野屋さんの裏手、ざつと五十坪ほどの敷地に十坪ほどの石積み土台を築き、五、六段の階段を登った上に一間四方ほどの瓦葺きの上屋を設け、その中に本殿が納められ、御神体として銅鏡が一つ置かれていた。神殿の後には一かかえもある椎の太木が枝を広げていて、小さな神社並みの規模を持つ氏神さまだった。伊能家の年中行事は、まず、この氏神への参拝から始まった。

現在では、文庫蔵の左手奥の用水の横に小さな本殿のみがおかれていて、子孫の一人としては胸の痛む思いである。

(続く)

陽炎へる菜種搾りし小屋の跡  
芙蓉閉づ外風呂までの下駄の音  
忠敬の日記の嵩や白障子

洋



○ 送水管一直宗竹と土管  
土中に埋め、同段端と  
台所に送水した。

昭和10年(1935年)頃

伊能忠敬旧宅の敷地全体図 (伊能洋氏による手書き図面)

伊能測量漫筆 一  
第二次測量に松平定信の影

渡辺一郎

お堅い話ばかりでは、皆様に飽きられてしまうので、伊能測量漫筆としてHPに掲載しているなから、面白い話も紹介したいと思います。

一〇月第一週のNHK・BS歴史館に、伊能忠敬を取り上げることが七月にきまり、佐賀フロア展の状況を急遽、撮影していただきました。

他に、いくつか情報提供してはいますが、面白い話として、伊能測量は松平定信もバックアップしていた、という仮説を話題として出しました。まだ、分かりませんが、劇画面にはなりそうもありません。しかし、折角書いたので、そのまま残しておきます。多分、こんな経過だったのでは、と思っっています。

\* 測量日記によると、第二次測量の最初の申請書には伊豆半島は入っていなかった。それが最終の申請書では唐突に、伊豆半島が登場するのは、以前から腑に落ちなかったが、期日関係を調べると、ますますおかしな点が出てくる。

第一次測量の地図を提出したのは、寛政一二年一月二一日(旧暦)だった。ところが、しかるべき筋の内意を受けた桑原隆朝から、第二次測量の申請を奨められたのは一月二〇日だったと、測量日記第二巻に書かれている。

そうであれば、第一次測量の地図は正式な提出以前に、しかるべき人物の内覧に供されていなくては、辻褄があわない。状況を総合すると前の將軍補佐役・松平定信の意向が反映された公算が大きい。そこで次のような寸劇のシナリオを考えてみました。

▽桑原が突然訪問 寛政一二年(1800)の暮れに、第一次測量の地図仕立てに忙しい忠敬宅に仙台藩医・

桑原隆朝があらわれる。お栄が取り次ぐ。

お栄「これはこれは、桑原先生わざわざの御来來、恐縮でございます。取り散らしておりますが、どうぞお通りください」

桑原「お忙しいところを失礼しますよ」

座敷に案内され、忠敬が出る。

桑原「忙しいところをお邪魔します。挨拶は抜きにしましょう。早速ですが、堀田撰津守様が地図の出来栄を気にしておられる。提出前に内見できないか、との仰せなので、飛んできたんだ」

忠敬「そうですか。それは有難いことです。一揃い仕上がったのですが、これを控えとし、さらに入念に上呈図を仕上げたいと思っるところです」

桑原「では、その控えをご覧に入れたら」

忠敬「結構です。桑原先生が持参していただけますか」

桑原「お預かりします」「お尋ねがあつても返事はできませんが、内見ならいいでしょう」

忠敬「お願いします」

▽堀田撰津守の上屋敷で

桑原「早速ですが、伊能宅へ行つてまいりました。てんやわんやでしたが、控え図が仕上がってましたので預かつて参りました。これと同じ図をさらに入念に仕上げて、提出すると申しております」

堀田「では早速広げて見よう」

と家臣を呼ぶ。小図一枚、大図二一枚(蝦夷地十一枚、本州十枚)を展開する。堀田撰津守は出来栄に驚嘆する。

堀田「こんな凄いことをやってくれたのか」「不測量と書いてあるのはどういう意味だろう」

桑原「地勢が險阻で近寄れず、測量できなかったの地図に入れなかつた部分だそうです」

堀田「律儀なことだ」「仕上げは予想以上なので問題はない」「これからどうするかな」

撰津守、少し考え込む。

堀田「老中首座の松平伊豆守(信明)様と相談しよう」

「う」「しばらく預からして欲しい」

桑原「いいでしょう」「どのみち、お上に提出する物ですから」

▽堀田撰津守は城中で老中首座の松平信明と地図を挟んで対面する。

信明「これが、伊能なる者の仕上げた地図か。今までの蝦夷図とは大分違つて確からしい感じだ」

堀田「さようです。奥州街道筋と蝦夷地東南岸しかありませんが、距離は全て実測し、天文観測で緯度を測り、測量結果を修正したとのことなんです」

信明「詳しいことは分からぬが、真実に近いような感じがする絵図だな」

堀田「私も同感です」「これからどうしますか」

信明「この調子なら3年もかけたら、関東・東海一円の精密な図が出来上がりそうな気がするが」

堀田「この項、楓軒の記録に出て来る――」

堀田「そのとおりです」「しかし、今、ここで御用として測量を仰せ出すのも、少し早いような気がします」

「伊能の方から測量を願い出させ、その結果を見てということにしてはいかががでしょう」

信明「いいだろう」

堀田「そのように取計らいます」

▽堀田は早速、桑原を呼び出して、忠敬から第二次測量の申請を出させるよう内意を伝える。桑原はすぐ忠敬宅に赴く。

桑原「蝦夷地の地図は老中首座の松平伊豆守様と若年寄・堀田撰津守様に大変好評のようだ」

忠敬「それは有難いことです。骨折り甲斐がありました」

桑原「ところで、もう一度、蝦夷地を測ってみる気はないかな」

忠敬「えー。それはまた、どういう風の吹き回しで」

桑原「実はな、先日、仕上がった蝦夷図を内覧に入れたあと、堀田撰津守様から内意があつてな、伊能殿にやる気があるなら、もういっぺん、という

ことだった」「蝦夷地の西半分を測量するという  
第二回測量の申請を出しておいたほうがいいだろ  
う」

忠敬「そういうことだったんですか」「やらせてい  
たきます。企画を練り直して申請を致します。

申請書は桑原先生の内見を頂いてから清書します。  
お時間をください」

桑原「いいだろう。よく考えるんだな」

忠敬は手ごたえを感じ、雄大な計画を立てた。蝦夷  
地は寝泊りすら大変な処だった。西半分を測るとな  
ると、足元を固める必要を感じ、函館で船を購入し船に  
寝泊りして測量をおこなう。測量が終わったら船は売  
却するという案を立てた。

そして現地で下図くらいまでの作業が出来るよう、  
事務用品運搬のため長持ち運搬の人足を希望する申請  
書を作り、桑原の内見に供した。

桑原はすぐ堀田撰津守邸に持参し、若年寄の内覧を  
受ける。さすがの撰津守もここまで考えていなかっ  
た。費用の問題も含めて考慮し、船購入の件と長持ち  
人足の件は削除し、口頭で申し出ては、とアドバイス  
した。

趣旨はすぐ、忠敬に伝えられ書き直しを勧められた。  
師匠の天文方・高橋至時にも報告され、協議が始まる。  
忠敬は口頭のお願いなどでは、無視される恐れを感じ  
て抵抗する。

万全の用意をせずに始めても無益な努力をするだけ  
でいい成果は得られないと反論。申請内容が議論と  
なった。

いまでもよくあることだが、実施部隊と指令中枢と  
の意見の食い違いである。

▽そんななかで、堀田撰津守は、退任はしたが幕閣に  
対して影響力を持っている前・將軍補佐役・松平定信  
(楽翁)を訪問する。

堀田「ご無沙汰しています。最近オランダ渡りの珍  
しい鳥類図鑑を入手しましたので、ご覧にいれ

ようかと思いつ参致しました」

定信「どれどれ。なかなか徹底して美しく出来てい  
る」「あなたの博物図誌もこのような物を考え  
ているんですか」

堀田「なかなか。思っただけですが進みません」  
定信、しばらく図鑑を眺める

堀田「ところで、楽翁様は地図には大きな関心をお  
持ちでしたが、最近天文方で、伊能なる測量師  
に命じて蝦夷図を制作させました」「なかなか  
良い仕上がりで存じ、提出前の控え図ですが持  
参しました。ご覧になりますか」

定信「見せてもらおう」  
堀田「ちと、広い場所が要ります」  
定信「では別室だな」

堀田「一枚の小図と二十一枚の大図の前で、定信と  
堀田撰津守

堀田「図中の朱線が測量した経路です。蝦夷地の二  
シベツまで約八百里を百八十日かけて歩いてい  
ます。所々にある星印は天体観測をして、地上  
の測量の誤差を修正した場所です」「そして沿  
道の風景を絵画風に描いています」

定信「なかなかやるのう。見事だ」「この先はどう  
する？」

堀田「そこですが、とりあえず、蝦夷地西部を考え  
てみては、と伝えてありますが、余程、大変  
だったと見えて、簡単にはいきません。船を買  
いたいか、長持ちの用意をといわれています」

定信「蝦夷地西部か——？ わしも谷文晁、村上島  
之丞を供にして、草鞋履きで伊豆を巡視したこ  
とがあるが、国防の要地は伊豆から相模、房総  
かと思う。本州東海岸を下北から伊豆あたりま  
で正確に測量するのが緊要ではないかな」

定信の伊豆巡視は史実。「伊豆から相模、房総は  
国防の要地」も持論。地図好きだったという——

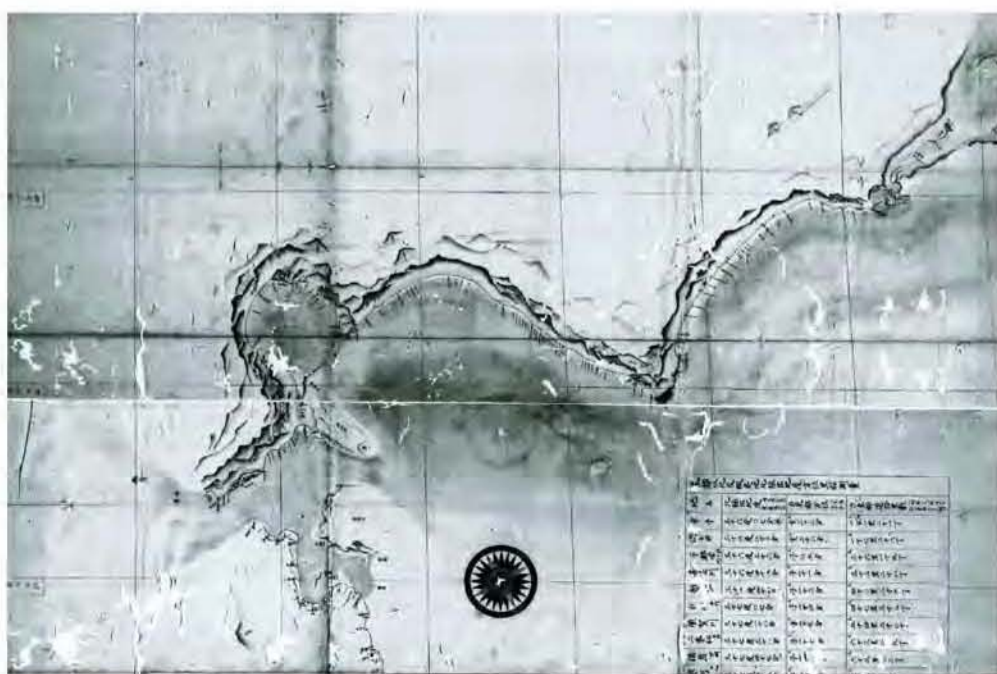
堀田「かしこまりました。本人は房総から蝦夷西部  
を測りたいと言っておりますが、蝦夷西部はあ  
きらめさせて、伊豆から本州東岸ということに

致しましょう」  
定信「それがいい」

かくて幕府の方針が決まり、堀田撰津守から高橋至  
時に対し、第二次測量は伊豆から本州東海岸として、  
忠敬と協議し申請するよう内意が伝えられた。至時は  
忠敬と相談し、幕府首脳部の意図を伝える。忠敬も満  
足し納得したのであろう。

申請書を出したあと、与えられる人足数などをめ  
ぐって、幕府の事務当局とやりとりがあったが、終始、  
幕府側のリードで計画が進められた。測量実施につい  
ての先触れは、勘定奉行・道中奉行連名で出され、幕  
府代官に各地への伝達を命じられた。

長持ちの持ち人足を利用可能にするなど、幕府の援  
助が向上したが、支給される手当ては、1日銀十匁と  
わずかに増えただけだった。経費面で忠敬は不満だっ  
たことが記録に残っているが、別の機会に紹介したい。



寛政12年小図（部分、東京国立博物館蔵）

# シーボルト「日本図」の原図を求めて ブランデンシュタイン城訪問記

渡辺 一郎

二〇〇五年八月、シーボルト「日本図」の原図を求めて家内と二人でドイツ国内のシーボルトゆかりの地を訪ね歩いたことがある。

その経過は会報四二号に書いたことがあるが、地図は紹介しなかったと思うので今回は地図を中心に再録してみたい。

訪れたのは、ビュルツブルグのシーボルト記念館からはじめて、ライデン大学日本語科、同大学植物園、ライデン博物館、ミュヘン博物館、シーボルト墓地、シーボルト記念館とシーボルトの子孫が住むブランデンシュタイン城の記念室だった。

## ビュルツブルグのシーボルト記念館

シーボルトは一七九六年ドイツのビュルツブルグで生まれた。父はビュルツブルグ大学の医学部教授であった。祖父も同大学の医学部教授だったから引き立てもあったらしく、父は若くして教授になっている。しかし、三一歳のとき死去したので、業績というようなものも伝えられていない。また、自宅は賃借だったらしく、住んでいた場所が特定されていないから、シーボルトの出生場所はわからない。市のインフォメーションでもわからなかった。

市街の中央の大聖堂からシーボルト記念館には、四番の路面電車で行くことができる。駅からなら二番である。街から離れた終点一つ手前の駅で下車する。車内で「次はシーボルト記念館です」と日本語案内があった。

記念館は門構えのある大きな敷地の中の独立した三階建ての一棟だった。入り口に日本語で看板がある。二階にわたる展示は肖像、複製写真、彼が使った医療器具（実物）、書簡などだった。所蔵資料は約六〇〇

点、長崎の風景、人形など、日本文化を紹介する展示も多い。地下には茶室があるという。

ちょうどドイツのテレビが撮影中だったが、テレビ放映も結構多いという。博物館を運営するシーボルト協会の理事長クライン・ラグナウオルフガン氏がインタビューに応じていたので挨拶をする。

「伊能忠敬」について調べており、何か面白いものがないかとやってきた。シーボルトの御子孫が所有するブランデンシュタイン城にも行きたいのだが、もし、ご存じなら紹介して欲しいとお願いしてみた。

しかし「ブランデンシュタイン氏は忙しい人です」と断られる。いきなり言われては仕方がないだろう。よっぽど親しくない限り、断られて当然である。

## ブランデンシュタイン城

この城はシーボルトの子孫、コンスタンティン・フォン・シーボルト伯爵の所有で、城の中にシーボルト記念室があると知って尋ねることにした。フランクフルトから東の方に約一時間急行列車にのると、ヘッセン州のシュルヒテルンという人口四〇〇〇人くらいの小さな町に着く。お城は、ここから直線距離約五キロ離れたエルム村にある。なぜシーボルトの子孫が城主かというところである。

シーボルトの末娘（次女）マチルデ・アポロニアは、グスタフ・フォン・ブランデンシュタインと結婚した。夫は陸軍将校で退役のときは歩兵師団を率いる陸軍大将だった。

退役後、出身地のブランデンシュタインとは三〇〇キロも離れているが、自分の出身地と同じ名前のブランデンシュタイン城が気になって購入し、以後子孫が継



ブランデンシュタイン城の城門を入ったところ

承している。

現在の当主は、フリッパ・フランツ・フォン・シーボルト（以下、単にシーボルトという）から四代目に当たる。経営コンサルタント、マルタ騎士団社会奉仕団ドイツ支部会長として多忙という。

そのせいか、メールで見学をお願いしたが、返事はいただけなかった。出発ぎりぎりまで待つて、もし返事があったら通訳を雇って訪問しようと考えていたが駄目だった。

それなら、アポ無しで押しかけようと決め、伯爵に送ったメールの写し、アメリカ大図展図録などを用意して出かけたのである。

フランクフルトの駅のインフォメーションで聞いたが、この城への行き方は分からなかった。列車だけ確認して駅までは到着したが、そこから先の足が見当たらない。

そのうち、車を持っているが迎えでもなく、タクシーでもない人に気がついて、城まで運んでくれない



シーボルト記念室

かと地図を見せて交渉した。交渉成立、城門まで送ってもらえた。お礼として二〇ユーロ払う。城は山頂にあつて、周囲の村々は一望できる。城門脇のインターフォンを押して見学を申し込む。しばらくして、門を開け、女性が胡散くさそうな顔で現れた。来意を話し、城主の伯爵にあてた英文のメールとアメリカ大図の図録を渡して待つ。今度は女性の主人とおぼしき番人風の作業着の男性が登場する。この方はUve Kerschmann氏だった。同じことを話してお願いする。「Mr.ブランデンシュタインは不在だ。明朝ここに来る」という。資料を見せていただけるようお願いすると、伯爵が来てからだとのこと。それではMuseumだけでも見せて欲しいと頼む。だんだん分かってきたらしく、城内の記念室に案内された。記念室は一つだが綺麗に飾つてある。しかし、資料的には目ぼしいものは何もない。まあ、掛けて下さいと椅子を薦められ休んでいると、



伝・シーボルト手写の日本東半部

ではないので、名刺を出してお礼を申し上げた。かくて、アポなしの押しかけ訪問でありながら、人々の善意に助けられ一番難物の調査を終えることができてホットした。これも忠敬さんの人徳であろう。

資料箱をこそそそやっていたが、のぞくと植物の写生画だった。写真を撮らせてもらう。地図はないかというところへ呼び出しの電話。予約した来客らしい。お好きなように見て下さい。写真もOKといって部屋を出てゆかれた。これはまことに都合だった。一番見たかったのは秦新二『文政十一年のスパイ合戦』にあるシーボルトが一晚で写して持ち帰ったという地図だった。それらしい地図が見つかったので、詳しく眺める。別図の「シーボルト手写日本図(シーボルト家蔵)」のとおりの薄紙に手書きで写した精細なものだった。シーボルトは地図職人でもあったらしい。だが、本図では房総半島や下北半島の形状が全く違っている。シーボルト日本図の原図とは思われない。刊

行されたシーボルト日本図は、伊能小図くらいの元図がないと、作れそうもないと思うが、シーボルトが急いで写して持ち出したといわれるオリジナル写図は依然として闇のなかである。ビュルツブルグのシーボルト博物館では、いいものは依然、ブランデンシュタインにあると聞かされてきたが、どうもそんなことはなさそうである。Uve Kerschmann氏は、お金の関係からコレクションは、ほとんど手放してたいしたものはないと言っていたが、本当にそうらしい。帰りは散歩を楽しみながら歩いていたら、お城にパーターの打ち合わせにきていたロータリークラブ役員の方が、わざわざ車を止めて駅まで送っていただいた。城で私たちの話を聞いてきたらしい。駅では時刻表を調べ、ホームも教えていただいた。お金を渡す人

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎 編著 井上辰男

【第三次測量】(羽越) 自 享和二年六月十一日 至 享和二年九月五日

【表中赤色文字は改訂増補部分】

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
三	(7.2)	深川黒江町	東京都江東区	忠敬隠居宅	高橋作左衛門より 測量御用被仰渡	0090
十一	(7.10)	草加宿	埼玉県草加市		富岡八幡宮参詣。恒星測定	0087
十二	中飯 (11)	大沢町	同 越谷市			0087
		粕壁宿	同 春日部市		恒星測定	0087
		幸手宿	同 幸手市			0087
十三	(12)	栗橋宿	同 栗橋町	虎屋久右衛門	粕壁宿外に古利根川あり橋を渡 る。恒星測定	0087
十四	休 (13)	野木宿	栃木県野木町		房川を渡る。板東太郎川の上流 なり。前に関所あり。恒星測定	0087
十五	(14)	石橋宿	同 下野市	本陣伊沢郡蔵		0069
十六	休 (15)	雀宮宿	同 宇都宮市			0069
		宇都宮池上町	同 宇都宮市	駿河屋平右衛門	恒星測定	0069
十七	休 (16)	白沢宿	同 宇都宮市		宇都宮明神へ参拝 鬼怒川を渡る	0069
		氏家宿	同 さくら市	丸屋忠右衛門		0069
十八	(17)	佐久山宿	同 大田原市	岩野屋平左衛門	恒星測定	0069
十九	(18)	越堀宿	同 那須塩原市	本陣河内屋源蔵	恒星測定	0069
二十	(19)	白坂宿	福島県白河市	脇本陣岩井屋庄三郎	恒星測定	0068
二一	(20)	白川城下	同 白河市	本陣芳賀源左衛門	暦局へ書状を出し、会津若松迄泊 触を出す。	0068
二二	休	飯土用村	同 白河市			0068
二三	(21)	上小屋村	同 白河市	内山茂市	恒星測定	0068
二四	(22)	長沼村	同 須賀川市	本陣矢部唯左衛門	恒星測定	0068

享和二年六月(1802)



二四	休	勢至堂	同	須賀川市	本陣二瓶又右衛門	恒星測定	0068
二五	休	福良宿	同	郡山市	名主吉田新右衛門	猪苗代湖を一覽し、舟で名所を見る	0068
二六	(25)	原宿	同	会津若松市	本陣 会津郷頭 坂内市郎右衛門	此日大に冷し。袷を着	0067
二七	(26)	会津若松城下 七日町	同	会津若松市	本陣 問屋検断兼帯 菊地伝十郎	朝曇大に冷し、袷と襦袢を重服。 恒星測定	0067
二八	(27)	同	同	湯川村	同	道中測器を調べる	0067
二九	(28)	塩川宿	同	喜多方市	検断名主兼帯 栗村平八	途中村より磐梯山、厩岳を測る	0067

享和二年七月(1802)

一	(7.29)	塩川宿	福島県喜多方市	検断名主兼帯 栗村平八	大風雨逗留	0067
二	(30)	大塩宿	同 北塩原村	検断問屋兼帯 穴沢源吉	大塩の地内より高曾弥山を測る。谷合に而塩の沸井あり。	0067
三	(31)	松原宿	同 北塩原村	問屋喜兵衛	佐原より湯殿山参詣のものに出逢、佐原へ書簡を遣す	0067
四	(8.1)	綱木村	山形県米沢市	問屋検断兼帯 中川久四郎	奥州羽州の堺則松原峠を越す	0067
五	(2)	米沢城下東町	同 米沢市	遠藤孫左衛門	恒星測定。若松城下より米沢迄出候、泊触写し落候に付、此所へ出。山形迄泊触を出す	0067
六	休	糖野目宿	同 高島町	丸森治郎左衛門		0067
七	(4)	上の山城下	同 上市市	佐藤孫七	川樋村出口に笈の清水と云名所あり	0066
八	休	松原宿	同 山形市	本陣問屋宿老兼帯 原田弾蔵	恒星測定	0066
	(5)	山形城下旅籠町	同 山形市		恒星測定。新庄まで泊触を出す。	0066

享和二年七月(1802)

二四	二五	二六	二七	二八	二九	一	二	三	四	五	六	七	八
休	休	(25)	(26)	(27)	休	(7, 29)	(30)	(31)	(8, 1)	(2)	休	休	(5)
勢至堂	福良宿	原宿	会津若松城下 七日町	同	竹内村	塩川宿	大塩宿	松原宿	綱木村	米沢城下東町	糖野目宿	中山村	松原宿
同 須賀川市	同 郡山市	同 会津若松市	同 会津若松市	同 湯川村	同 喜多方市	福島県喜多方市	同 北塩原村	同 北塩原村	山形県米沢市	同 米沢市	同 高島町	同 上市市	同 山形市
	本陣 二瓶又右衛門	本陣 会津郷頭 坂内市郎右衛門	本陣 問屋検断兼帯 菊地伝十郎	同	同	検断名主兼帯 栗村平八	検断問屋兼帯 六沢源吉	問屋喜兵衛	問屋検断兼帯 中川久四郎	遠藤孫左衛門	丸森治郎左衛門	佐藤孫七	本陣問屋宿老兼帯 原田弾藏
恒星測定	猪苗代湖を一覽し、舟で名所を 見る	此日大に冷し。裕を着	朝曇大に冷し、裕と襦袢を重服。 恒星測定	道中測器を調べる	途中村より磐梯山、厩岳を測る	大風雨逗留	大塩の地内より高曾弥山を測 る。谷合に而塩の沸井あり。	佐原より湯殿山参詣のものに出 逢、佐原へ書簡を遣す	奥州羽州の堺則松原峠を越す	恒星測定。若松城下より米沢迄 出候、泊触写し落候に付、此所へ 出。山形迄泊触を出す		川樋村出口に笈の清水と云名所 あり	恒星測定
0068	0068	0067	0067	0067	0067	0067	0067	0067	0067	0067	0067	0066	0066

三三	小休	浜井川村	同	井川町	0062
休	一日市村	同	八郎潟町	本陣百右衛門	0062
休	鹿渡村	同	三種町	本陣近右衛門	0060
(19)	森岡村	同	三種町	名主勘左衛門	0060
(20)	能代町万町	同	能代市	能登屋半六	0060
(21)	同	同	同	同	0060
(22)	同	同	同	同	0060
(23)	同	同	同	同	0060
(24)	同	同	同	同	0060
(25)	同	同	同	同	0060
(26)	同	同	同	同	0060
(27)	同	同	同	同	0060

享和二年八月(1802)

一	(8.28)	能代町万町	秋田県能代市	能登屋半六	0060
二	(29)	同	同	同	0060
三	(30)	同	同	同	0060
四	(31)	鶴形村	能代市	本陣治左衛門	0060
休	飛根村	同	能代市	同	0060
小休	荷揚場村	同	能代市	同	0060
休	今泉村	同	北秋田市	同	0060
(9.1)	綴子村	同	北秋田市	本陣高橋八郎兵衛	0060

午前は時々雲中に日影も見、午後より一面薄黒雲覆い。日影不見、されども八頃より測量場所に詰居。日食初虧、食基頃は雲猶深蓋ひ、日影一切見へず。復円前に漸濛影を見る。大遠鏡・中遠鏡を以測る。復円の頃は、又雲蓋不見、日入て後空晴、六後又曇る。四前後、雲間恒星を測る

午中太陽測定。  
弘前迄泊触を出す。

午中太陽測定。曆局行測量御用書状出す。

恒星測定

恒星測定

恒星測定

恒星測定、皆直に日食測量の南北線の仕立に初る。

子午線午後に来あがる

忠敬発病

午中太陽測定。夢に堀田候に謁す。

米代川川口の辺を測る

恒星測定

午中太陽測定

恒星測定

三倉岬の坂の上より八郎潟を一望、八郎潟は横四里、長七里、深四尋。

六	(2)	大館村	同	大館市	浜松新六	恒星測定	0060
七	(3)	碓ヶ関町	青森県平川市	与十郎	矢立峠を越す。碓ヶ関入口に弘前 の大番所あり。普請もよく、流水 を脇と前になし、嚴重に見ゆ。	恒星測定	0043
八	休	石川村	同 弘前市	大鰐村より岩城山測る。 石川村より八甲田山測る。	恒星測定	0043	
九	(4)	弘前城下土手町	同 弘前市	三国屋吉郎右衛門	御領主より菓子一箱被下置、恒 星測定、曆局へ書状を出す。泊触 を出す。	恒星測定	0043
十	(5)	同	同	同	青森町領主逗留	青森町領主逗留	0043
十一	(6)	新城村	同 青森市	佐五右衛門	青森町領主逗留	青森町領主逗留	0039
十二	(7)	油川村	同 青森市	近江屋津兵衛	青森町領主逗留	青森町領主逗留	0039
十三	(8)	同	同	同	恒星測定	恒星測定	0038
十四	(9)	蟹田村	同 外ヶ浜町	近江屋清六	恒星測定	恒星測定	0039
十五	休	蓬田村	同 蓬田町	対馬九郎兵衛	恒星測定	恒星測定	0039
十六	(10)	平館村	同 外ヶ浜町	小倉屋四郎兵衛	恒星測定	恒星測定	0038
十七	(11)	母衣月村	同 今別町	工藤忠兵衛	恒星測定	恒星測定	0038
十八	(12)	三厩湊	同 外ヶ浜町	秀蔵外三厩より小泊の間、算用 師越を仕越に測る。	恒星測定	恒星測定	0038
十九	(13)	同	同	岡を宇鉄迄測る。舟に乗り竜飛 岬を測る	恒星測定	恒星測定	0038
二十	(14)	同	同	恒星と午中太陽測定	恒星と午中太陽測定	恒星と午中太陽測定	0038
二十一	(15)	同	同	高田城下迄先触を出す。	高田城下迄先触を出す。	高田城下迄先触を出す。	0038
二十二	(16)	小泊村	同 中泊町	川村屋儀兵衛	途中海岸の上の高き草原に出、小 泊より小屋掛けをなし、弁当茶 酒等を用意せり。此所に休。食事 をなし、松前地所々を測る。恒星 測定	恒星測定	0038
二十三	休	相内村	同 五所川原市	美和五郎兵衛	十三瀧縁を測る	十三瀧縁を測る	0038
二十四	(17)	十三町	同 五所川原市	能登屋金右衛門	恒星測定	恒星測定	0038
二十五	(18)	鯨沢町	同 鯨ヶ沢町	駿河屋金九郎	恒星測定	恒星測定	0038

享和二年九月(1802)

一	休	浜田村	秋田県三種町	肝煎茂吉	恒星測定	0060
二*	(9.27)	宮沢村	同 男鹿市	嘉右衛門	恒星測定	0060
三*	(28)	鞆ノ木村	同 男鹿市	大淵常右衛門	恒星測定	0062
四*	(29)	舟越村	同 男鹿市	西村栄助	恒星測定	0062
五*	(30)	同	同	同	舟越村より舟川村迄測る。恒星測定	0062
【支隊】	(10.1)	土崎港	同 秋田市	加賀屋忠兵衛	恒星測定	0062
二	(9.28)	北浦村	秋田県男鹿市	肝煎藤右衛門		0062
三	(29)	戸賀村	同 男鹿市	清右衛門		0062
四	(30)	北浦村	同 男鹿市	肝煎藤右衛門	戸賀村より青砂村迄測る	0062
五	(10.1)	舟川村	同 男鹿市	五郎兵衛	小浜村より舟川村迄測る	0062
【本隊】						
六	(2)	土崎港	同 秋田市	加賀屋忠兵衛	男鹿海辺支隊待合逗留 午中太陽測定と恒星測定	0062
七	(3)	長浜村	同 秋田市	清四郎	恒星測定	0063

二四	(20)	深浦町	同 深浦町	越後屋庄右衛門	忠敬23日夜より腹痛 恒星測定	0059
二五	(21)	岩崎村	同 深浦町	兵右衛門	忠敬病氣、恒星測定	0059
二六	休	松神村	同 深浦町			0059
二七	(22)	大間越村	同 深浦町	彦左衛門		0059
二八	(23)	岩館村	秋田県八峰町	肝煎久右衛門	大間越出立、直に峠を上る。津軽番所あり。恒星測定	0059
二九	(24)	八森村	同 八峰町	宇左衛門	恒星測定	0059
三十	(25)	能代町	同 能代市	庄屋相沢金十郎	秀蔵外3名、浅内村海辺迄測る。 恒星測定	0060
三三	(19)	関村	同 深浦町	名主中原屋孫左衛門		0059

十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八
(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)
新保村	笹川村	同	大川村(府屋町)	温海村	加茂村	酒田町	吹浦村	同	同	塩越村	本庄城下中町
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
村上市	村上市	同	新潟県村上市	鶴岡市	鶴岡市	酒田市	遊佐町	同	同	にかほ市	由利本庄市
藤助	三左衛門	同	又左衛門	太郎左衛門	八郎左衛門	加賀屋藤三郎	高橋津右衛門	同	同	本陣金仁助	名主細屋弥治右衛門
	海岸、岩石大難所。舟に而海岸海中を望めば、奇岩奇石おほく、山麓岩上の奇松、絶景無類なり。	病痰。恒星測定	海中奇岩おほし。	三瀬前海際、山々悉岩石、海中に岩あり。	御用宿甚狭小、測量難相成に付宿替。恒星測定		九里と云。庄内領。家二百軒余	象潟海辺本道迄不残測る。恒星測定	呑頃と云所に而処々を測る舟に乗り、象潟諸島を測る	蚶満寺へ立寄一覽す	曆局へ書状を出す
0072	0071	0071	0071	0071	0070	0070	0070	0070	0064	0064	0063

享和二年十月(1802)		一	(10.27)	柏崎町	新潟県柏崎市	彦十郎		0076
		二	(28)	鉢崎村	同 柏崎市	十兵衛	鉢崎村御関所あり。通行之節、長持改之事あり。恒星測定	0076
		三	(29)	黒井村	同 上越市	田中権右衛門	恒星測定	0080
		二	(16)	早川村	同 村上市	市右衛門	根屋村より岩ヶ崎迄旧榊原領なり、村々の人品古風にして敦朴なり。此六月測量御用の御触ありしに、此山坂難所の道路を盆中の遊に普請し、或は新道を造る	0072
		二	(17)	岩船町	同 村上市	年寄与惣左衛門	恒星測定	0072
		二	休	瀬波村	同 村上市	近蔵		0072
		二	休	岩井浜	同 胎内市	庄屋忠右衛門		0073
		二	小休	中村浜	同 胎内市	庄屋佐藤三郎左衛門		0073
		二	(18)	村松浜	同 胎内市	平野安之丞		0073
		二	(19)	太郎代浜	同 新潟市北区	名主忠兵衛	恒星測定	0073
		二	(20)	新潟町古三ノ町	同 新潟市中央区	和助	あがの大川、信濃川を渡る 恒星測定	0073
		二	(21)	同	同	同	同所海辺に而所々山々島々を測る。	0073
		二	(22)	角田浜	同 新潟市西蒲区	七左衛門		0074
		二	(23)	間瀬村	同 新潟市西蒲区	伝右衛門	忠敬荷物と共に岡道を通る 測量の者を海岸へ遣。	0074
		二	休	野積村	同 長岡市	庄屋猶右衛門	旧家に而家作よく、屏風・腰張・かけ物等名画名筆を所持なせり。順徳院佐渡へ遷され給ひし時、渡海の風波を待て、三十余日御逗留あり。源義経卿奥州へ落給ひし時も、主従此家に逗留 恒星測定	0074
		二	(24)	寺泊町	同 長岡市	五十嵐武兵衛		0074
		二	(25)	出雲崎町	同 出雲崎町	橘左衛門	恒星測定	0074
		二	(26)	同	同	同	柏崎迄六里半余と云に付二里余仕越測る。恒星測定	0074

二十	十九	十八	十七	十六	十五			十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四						
(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	休	休	休	休	(9)	休	(8)	(7)	(6)	休	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	(1)	(3)	(30)	休
同	同	熊谷宿	本庄宿	倉ヶ野宿	高崎城下荒町	松井田宿	坂本宿	羽根石茶屋	山中茶屋	軽井沢宿	追分宿	小諸城下市町	上田城下海野町	下戸倉宿	矢代宿	同	同	善光寺大門町	柏原宿	関山宿	同	高田城下呉服町	今町	
同	同	熊谷市	埼玉県本庄市	同 高崎市	同 高崎市	同 安中市	同 安中市	同 安中市	群馬県安中市	同 軽井沢町	同 軽井沢町	同 小諸市	同 上田市	同 千曲市	同 千曲市	同	同	同 長野市	長野県信濃町	同 妙高市	同	同 上越市	同 上越市	
同	同	本陣竹井新右衛門	本陣内田七左衛門	脇本陣庄兵衛	大黒屋九兵衛	本陣駒之丞	本陣三郎左衛門	本陣小池小左衛門	茶屋本陣 丸屋六右衛門	市右衛門	本陣市左衛門	喜太郎	勘助	本陣十郎右衛門		同	同	藤屋高野平左衛門	本陣亦左衛門	同	同	本陣 三国屋八郎右衛門	新町 伊右衛門	
大雪のち雨、逗留	雨天逗留		恒星測定						碓氷峠を上て、熊野三社権現の社前に至て諸山を測量す	恒星測定		富士見坂にて富士山を測る 恒星測定	恒星測定	恒星測定	千曲川を渡る	犀川大水に付川留逗留 善光寺へ参詣 犀川大水に付川留逗留	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	先触、泊触並に鉢崎御関所一件の掛合をなし。猶関川御関所通行尋問等に付逗留。先触、泊触、曆局へ書状を添出す。恒星測定	恒星測定	恒星測定	
		0088	0094	0094	0094	0095	0095	0095	0095	0095	0095	0095	0095	0096	0081		0081	0081	0080		0080	0080	0080	



二三	二三	二
(18)	(17)	(16)
深川黒江町	蕨宿	桶川宿
東京都江東区	埼玉県蕨市	同 桶川市
忠敬隠居宅	裕次郎	本陣利兵衛
恒星測定 荒川舟渡。本郷追分より曆局へ相廻、高橋先生に謁後、神田明神前より昌平橋を渡、日本橋より万町、茅場町、湊橋を越、永代橋を経て、隠宅へ着。	恒星測定	熊谷宿出口にて富士山・筑波山・日光山・浅間山、其外諸山を測る。恒星測定
0600	0688	0688

## 佐賀フロア展が開かれました

渡辺一郎

佐賀支部の馬場会員の大変なお骨折りで実現した完全復元伊能図佐賀展が成功裏に終わりました。会期は八月三日（金）から五日（日）の三日間。会場は、佐賀城内にある市村記念体育館でした。東京からは、渡辺、木谷、堀野、伊藤、佐藤、高橋が参加しました。この体育館は、佐賀出身で、OA機器メーカー・リコー社長として同社の基礎を築いた市村清さんが個人で寄付した体育館です。入場者は市役所の発表で三五〇〇人でした。市の目標は三〇〇〇人でしたから、楽々達成できてよかったと思います。特に小学生と一緒の若い家族連れが目立ち、お供の学校に行かない弟妹が駆け回る賑やかな会場でした。

直前になって、NHKのBS歴史館で伊能忠敬を取り上げていただくことになり、急遽フロア展会場の撮影を予定して、三日に録画されました。放送は一〇月四日二〇時から一時間の予定ですから、この記事をご覧になるころは、皆さんは結果を御存じの筈ですが、色々な方から感想を採録されています。二日の展開作業中に、筆者とアメリカ伊能大図発見の新聞発表を通じて旧知の、朝日新聞大野記者（佐賀支局勤務）が、久しぶりですと取材に現れ、奇遇に驚きました。続いて佐賀新聞、佐賀テレビ。日を変えて、読売新聞佐賀支局、業界紙、NHK佐賀、などが取材に見え、全報道機関、総乗りとって集客に大いに貢献してくれました。

\*

佐賀展のそもその始まりは、福岡展会場で馬場さんが、会員の佐賀県土地家屋調査士会平野副会長と知り合いになり、佐賀でもやりたいね、との話し合いからでした。一方、一昨年の総会の二次会で、馬場さんから、小城の羊羹屋さん・村岡総本舗社長さんの話が出ましたが、村岡さんは旧知なので、福岡展を見にきていたただけるなら、渡辺が御案内する、と申し上げました。そのときは、日程が合わなくて村岡社長を御案内できなかったのですが、声をかけた以上、一度はお邪魔してお願ひしなくてはと思い、後日村岡社長にアポをとっていただきました。



\*

ところが後ほど、馬場さんから、鹿島市に伊能測量二〇〇年記念行事の計画があることを知り、また香取市長がそのプレ行事のため鹿島市に招待されていることも聞きました。そこで、二〇一一年一〇月の「八女フロア展御視察のお願い」という書面を作って、馬場さんに、鹿島市長さんに届けていただくよう依頼しました。元農水省局長の市長さんはお会いくださって、担当者をお八女展に出してくださいました。いっぽう、香取市長さんには、大河促進の木内会長と一緒にお目にかかる機会がありましたので、鹿島市長に頼んでいただくようお願いしました。また、馬場さんは佐賀市長には面識

\*

後から事務局サイドで聞いた話では、鹿島市長は佐賀市でやらないなら鹿島でやろうとお考えになって、まず佐賀市長に話されたのだそうです。これみなかなか大変なお話です。佐賀市長さんは、すっかりボールを受けられまし

**完全復元**

# 伊能図全国巡回フロア展

in **佐賀**

**圧倒的なスケール感で  
伊能忠敬の全業績が佐賀に集結!**

今、蘇る壮大な実寸伊能大図を体感してください

**見学には靴下が必要です**  
(素足・ストッキング不可)

**入場無料**

【日時】平成24年8月3日(金)～5日(日)  
9:00～17:00(入場は16:30まで)

【会場】市村記念体育館(佐賀県佐賀市内2-1-35)

【主催】完全復元伊能図全国巡回フロア展in佐賀実行委員会  
(協賛団体)  
佐賀県土地家屋調査士会・一般社団法人佐賀県士づくりコンサルティング協会  
社団法人佐賀県不動産鑑定士協会・伊能忠敬研究会佐賀支部  
佐賀県・佐賀市・佐賀市教育委員会

【共催】完全復元伊能図全国巡回フロア展中央実行委員会  
【後援】国土交通省・厚生労働省・環境省・農林水産省・文部科学省  
【問合せ先】佐賀市都市デザイン課 TEL 0952-40-7103

三重津海軍所跡を世界遺産に

佐賀フロア展のポスター

歴史上の人物の生き方に憧れることがある。誰かを挙げるかは人それぞれだろうが、若い人ならば風雲の時代を生き抜いた織田信長や坂本竜馬だろうか◆個人的には伊能忠敬が気になる。日本列島の精密な地図を作り上げたという業績の重みはもちろんだが、50歳から学び始めたという遅咲きの経歴に引かれる。19歳も年下の学者を師と仰いだというから、その柔軟な人柄も魅力だ◆伊能家は名家であり、家業をまっとうした上で息子に家督を譲った。恐らく、50にして「天命」を知ったに違いない。精密な測量機器などない時代、自らの歩幅を一定にして歩き続けた。歩いた距離は地球1周にも上るといふから、その旅路は苦難に満ちていただろう◆その伊能全図を尺寸で完全に復元した地図を「体感」できるイベントが8月3～5日、佐賀市の市村記念体育館で開かれる。会場のフロアいっぱい地図を敷いて、来場者にその上を歩いてもらうという趣向だ◆今年は忠敬が佐賀を訪れて、ちょうど200年の節目でもある。そこに書き込まれた佐賀城や唐津城の姿に、どんな旅路だったのだろうかと思像も膨らむ◆全ての地図が完成したのは亡くなって3年後だったが、忠敬は71歳まで歩き続けた。その生き方はまさにヒーローだ。人生に遅すぎるということはないのだと信じさせてくれる。(史)

2012.7.29

佐賀新聞の応援

開催は決まりましたが、実務面はさらに大騒ぎが続きます。佐賀土地家屋さんの平野副会長にお願いして、協賛金と作業要員十一名を四日間出して

を申し上げます。ありがとうございます。

\*

た。

鹿島市長は、最終日の5日、マイクロボス1台その他で二〇数人連れておいでになり、熱心に見学されました。伊能忠敬のことを、ほんとはよくご存じでした。

鹿島の伊能測量二〇〇年記念は、全くユニークな別な企画で考えようでした。

\*

佐賀フロア展遂に実現。看板だけは上げていきましたが、実現の見通しは全く困難でした。しかしながら、キッカケを生かして、関係の向きにお願いして、とうとう実現しました。

会員の馬場さんが走りまわって、頑張ってください。いただいたお陰です。佐賀、鹿島、香取市と関係三首長さん、村岡社長への感謝とともに、実行委員会副委員長としてプロモータを勤められた馬場さんに、心から敬意を表し、御礼

を申し上げます。ありがとうございます。

\*

開催は決まりましたが、実務面はさらに大騒ぎが続きます。佐賀土地家屋さんの平野副会長にお願いして、協賛金と作業要員十一名を四日間出して

らい、また、お知り合いの元測量会社副社長の原田さんを通じて、土づくりコンサルタント協会(測量設計業協会)からも同じような御支援をいただいています。

市も多数の職員を出していただきました。売店は教育委員会の方々とか、よく考えておいででした。

一方で、併催事業として、市内の伊能の道ウォークを計画され、景品を村岡社長に提供してもらい、村岡さんご自身にも参加していただきました。

\*

開会式に引き続き、渡辺が、VIPを会場内に御案内しましたが、市長さんはじめ、これ、上にあがっていいんですか。どうぞ、どうぞ、そのために出来ていたので、御説明をさせていただきます。初めて見る伊能大図の威容に、皆さん感心しきりでした。

\*

翌三日は花火大会でした。館周は五時以降立ち入り禁止の花火打ち上げ場に早変わり。

お濠を隔てた城内の(財)鍋島報効会徴古館のペランダは絶好の観覧席です。からどうぞすかと誘われる。同館には、以前に地図調査と新聞発表で伺ったことがあったので、喜んで参加する。

主任学芸員さんは、その節はと、大変喜んでくれた。また、市長さん夫妻も招かれており、後ほどお見えになった。昨日お会いしたばかりだったが、真っ先にご挨拶をいただいた。私は体形に特徴があるので、すぐ覚えていただけるらしい。

\*

すべて終了後の翌日。飛行機まで時間があるので、何処かへ、となって三

一億円で再建された木造の本丸御殿に案内されたが、これは驚きだった。

こんな素晴らしい木造建築をいまだきでできるのかとビックリした。皆様も、佐賀にお出での節は、ぜひ立ち寄られたいと思う。

そして本丸御殿に入ったら、元測量会社副社長の原田さんが待つておられた。お濠の船にのらないかという。昨夜、暑いからと遠慮しておいたのだが、網を張って待ち伏せだった。そこまで言われるならと、時間を約束する。

本丸を終わって乗船場にいったら、洋服を脱いで、すっかり船頭支度の原田さんが待つていた。これにもまいった。ハス濠の間を、竿を上手に使って船を進めていただき、ハスの実を食べべたり、ハス畑を満喫させていただいた。ありがとうございます。

\*

お客さんに見ていただくために、我々はお客として、丁寧に歓迎していただき大変恐縮しました。

もう一つ佐賀流を感じたのは、佐賀には祭りが無いとの話だった。たまたまフロア展とお祭りが重なっていたが、今のお祭りは新しい祭りで、旧藩時代からの古い祭りは無いとのことだった。佐賀の藩主は、祭りに金をかけるのは無駄なことだとして、祭りをさせなかったという。同県内だが、譜代大名の唐津には盛大な祭りがあるのだが。明治維新は、薩長土肥が中心だったというが、肥前藩も実収が豊かで、お金があったから原動力になれたらしい。それから、このフロア展の実行委員長は市役所の課長さん、副実行委員長は馬場さん。二人ともいつも現場を走りまわって指図する第一線の隊長だった。

お飾りの実行委員長など置かない、というところも佐賀らしいと感じた。伊能忠敬研究会九州支部からは、多くの会員が手弁当で案内員に出ていただいた。厚く御礼申し上げます。

\*

【会員の皆様】 定例的でない新しいイベントを仕掛け、実現するのは、この位大変なものです。これまで、二〇会場で開催しましたが、各会場ごとにすべてドラマがあります。

愛媛フロア展は、NTT旧友との会話をもとにして、キッカケは私がつけましたが、地元側には、さらに壮大な仕掛けがありました。有料入場七千名という素晴らしい成績でしたが、経緯の詳細は知りません。

佐賀会場については、たまたま、全ての経緯を承知していますので、あえて公表し、中心となった馬場さんに敬意を表するとともに、各地の会員諸兄弟の参考に供するものです。



銚子で

# 伊能測量実験が行われました

宮内 敏

十月四日放送予定のNHK BS歴史

館「伊能忠敬」の中で使われる伊能測量実験のビデオ撮りが去る九月一日(土)千葉県銚子市で行われました。

伊能測量実験隊員は千葉科学大学の学生ら八名で、隊長役は菅谷淳美君です。

測量指導は研究会名誉代表の渡辺一



君ヶ浜しおさい公園：エイ・エイ・オーの掛け声で撮影開始

郎、地元会員の宮内敏、工藤忠男、応援に高宮夫妻、戸村茂昭氏が駆けつけました。

銚子は伊能忠敬測量術を確立した場所であり、伊能測量実験の場所にも選ばれました。

偶然にも撮影日の九月一日は二一年前、伊能忠敬測量隊が富士山の方位を測るべく銚子滞在中で、関係者一同感無量なものであります。

当日早朝七時に君ヶ浜しおさい公園に撮影クルー、伊能忠敬研究会メンバー、隊員役の千葉科学大学生他約二十名が集合しました。リハーサルは無く即本番の撮影です。簡単な挨拶の後、日程説明、役割分担等をして、エイ・エイ・オーの掛け声で撮影が開始されました。

君ヶ浜海岸での撮影は主として測量方法の指導を兼ねた「測量風景」撮りとなり、指導は伊能忠敬研究会の会員が行いました。

実際の測量実験は隊長役の指示で終始行われます。隊長は主羅針役(真北に対する方位角を測る人)の学生菅谷君が務めます。

主羅針の指示で君ヶ浜の砂浜に梵天役により梵天A、B、Cが所定の位置に立てられます。主羅針役はA B間の方位角(真北に対する方位)を測り大きな声で読み上げます。記録役は、

それを聞いて記録した後復唱します。間縄役は駆け足でA B間に縄(今回は五十M)を張ります。メートル以下は間竿で測ります。

(今回の間竿長二M)。記録役はA B間の距離を記録します。次にB A間の逆方位(真南に対する方位)を測ります。今回は記録役が兼ねます。方位角は順方位角と逆方位角の平均値をとります。そして主羅針役の指示で次のステップに進み、進行方向に梵天を立てます。

これを繰り返えし、曲線も直線の集まりとみなして測量します。

君ヶ浜での測量風景撮りは、当初午前中を予定していましたが十時過ぎまでに終了することができました。いよいよ作業を伴う実際測量へ移行です。

当初の実測量地候補は犬吠埼を中心とした周辺の地域が計画されましたが、犬吠埼灯台下の遊歩道の一部が立ち入り禁止の状態でも臨時的にも許可されなかった為、犬若から長崎鼻周辺までの測量になりました。

犬若は一般に犬吠埼より知られていませんが、伊能忠敬測量隊の富士山の方位測量地点であると同時に銚子半島測量の

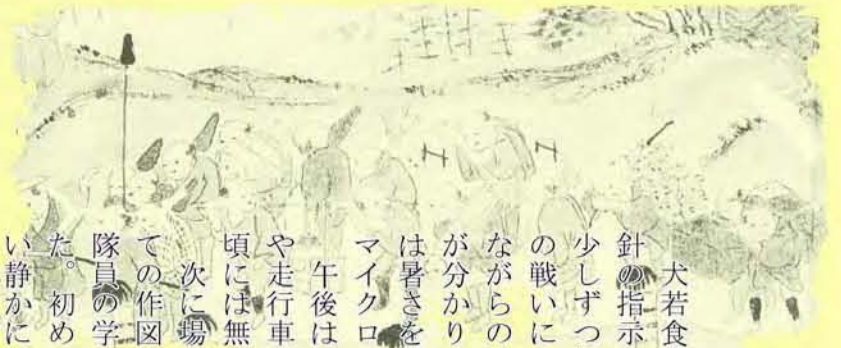


君ヶ浜海岸：梵天を立て方位を測り間縄と間竿で距離を測ります

起点でもあり重要なポイントです。

現在、銚子市はジオパーク推進協議会を立ち上げてJGC(日本ジオパーク委員会)の登録をめざしています。その中核が千葉科学大学で学術研究とガイド養成を担っています。今回協力して下さった学生さんの多くが参加しています。会員の工藤さんはジオパーク推進市民の会の会長です。伊能忠敬の足跡は銚子のジオサイトと重なっており大切にしたい文化遺産です。

犬若からの測量は忠敬の足跡を踏襲しての測量となりました。



犬若食堂前の歩道を起点に定め、主羅針の指示で測量を開始しました。作業は少しずつ慣れてきましたが強日差しの戦いになりました。水分補給に注意しながらの測量です。伊能隊の苦勞の一端が分かります。午前の部が終わり、昼食は暑さを避けて冷房をガンガンきかせたマイクロバス内となりました。

午後は長崎周辺の測量です。駐車車両や走行車両に注意しながらの測量も三時頃には無事終了しました。

次に場所を海鹿島の大徳ホテルに移しての作図作業です。作図方法の説明の後隊員の学生たちによる作図が始まりました。初めは喧々譁々でしたが慣れるに従い静かに順調に進行しました。作図面に犬若から長崎の海岸線が現われて学生たちに満足の表情が見えました。こうして午後八時までに全て終了しました。

**使用機材**

**梵天** 四メートルもの三本。

**間縄** 本来文字通り長さの単位は間ですが、今回はメートル単位とし、五〇M物を用意。



実験で使ったレンザティックコンパス



参考的に実験で使った杖先らしん  
銚子市：滑川藤兵衛家所蔵



**間竿** 忠敬は一問物二本繋いで二問としましたが今回は二M物を用意。

**方位計** 忠敬は半円方位、円方位、杖先らしん等用いたが、今回は簡易的にオリ

エンテールリングでも使われるレンザティックコンパスを使用。



**伊能測量実験経路図**

長崎灯台 → ⊙

## 新入会員自己紹介



### 友田修司さん (東京都杉並区)



昨年一〇月ごろ、郷里広島の前祖のルーツ山県郡北広島町の縁戚から突然の

知らせがありました。「伊能忠敬が先祖の家に泊まったという話が伝わっているので調べて欲しい」との依頼でした。伊能忠敬に関しては、高校の日本史で「日本地図を初めて作った人」という程度の知識しか持ち合わせていなかった私は、正直あまり関心がなかったのですが、とりあえず国会図書館で調査を開始しました。調査の過程で、名誉会長の渡辺一郎さんが何冊か小中学生向けの伊能忠敬の偉人伝を書かれています。伊能の真つ直ぐで好奇心に溢れる人柄と超人的な業績に触れる中で、関心を持つようになり、ネット検索でも調べてみると、研究会とIno Pediaのサイトが見つかったため、先祖の家に止宿した事実の確認のため、Ino Pediaに連絡してみました。

は広島浅野藩の全面的支援のもとになされたことを知り、確かに名誉なことだと納得したというのが、この会への入会の動機です。

先祖は戦国時代に厳島神社の政所があった安芸国佐伯郡友田村に大和の平城から赴任しました。神社の造営と神領衆(厳島神主家の家臣団)のため、中国山地(奥出雲・山県郡・石見)で「たたら製鉄」を経営し、江戸時代には伊能家同様、醸造業も兼業していました。幕末明治に鉄道の暴落で屯田兵に行きました。

第八次測量隊が安芸国の内陸部を訪れたのは文化一〇年(一八一三年)十一月(陰曆)です。測量日記には「九ツ時頃志路原本村着。止宿庄屋源三郎、長百姓菅右衛門、着後も益雪又風。」とあり、一二月(西曆)の吹雪の厳しい天候下での測量だったようです。隊員は、永井充房(隊長)、門谷清四郎、保木永誉、大山甚七、計四人、従者二人(友吉、弥兵衛)でした。

私の専門は理系(量子化学)で、伊能忠敬に関してはまったくの素人であり、研究会にはどれだけ貢献できるかわかりませんが、先祖供養にもなることを願って勉強させていただくため入会いたしました。どうぞよろしく願います。来年は九州・中国地方の二〇〇周年記念の年で、先祖の村ではささやかな記念事業を計画しているようです。会のますますのご発展を祈ります。



### 会員便り

松尾紀成会員(嬉野市)から、郷土史のお仲間のフロア展の感想をよせていただきましたので紹介します。

### フロア展 in 佐賀に感動!

嬉野市 馬場 清

今年初夏の頃、佐賀新聞に江戸時代日本全国を測量された伊能忠敬氏の原寸大の「伊能図」が展示される、それも地図上を歩いて観察できる旨の記事を読んで心が弾んだ! ぜひ観たいと思ひ、記事をファイルしてその時を心待ちにしていた。

いよいよ、今夏完全復元の「伊能図」に市村記念体育館でお会いすることができました。

フロアに敷き詰められた地図は畳約二五〇畳ほどある膨大な地図面でした。西暦一八〇〇年五五才の伊能忠敬測量隊は数名の隊員で構成され、全国測量にでかけられました。

奥州く蝦夷南東岸く相模伊豆く本洲東海岸く羽越く東海・北陸く中国沿岸く四国・大和路く九州一次く九州二次く伊豆七島く江戸府内を足かけ一七年年を経る長い歳月で、ほぼ日本各地の測量を終えられました。

佐賀県下には二〇〇年前の一八一二年に唐津く伊万里く佐賀城下く鹿島を

回り。翌年は嬉野く塩田く小城く三瀬と伊能隊は県下をくまなく測量されていた。

大図の原本は火災。震災で焼失したそうです。写しが発見され、修復構成し、今回の全国巡回展となったと聞きました。

体育館フロアの地図上を歩いて観察ができた事に身震いがする程、感動をうけました。

現在の地名と変わらない地名が多くあり、距離も道路も海岸線も本当に正確に描かれ、当時の地名がそのままに残されておりました。特に地元の地図に興味があり、デジカメで撮り紙台紙にして保管している。

「伊能図」を観て、伊能忠敬はなぜ日本各地を測量しようと思ったのか、測量機器の操作のしかた、機器は何かから手に入れたのか、当時の伊能隊の測量行動やその隊を迎えた地元の人々の応対、宿場は何処だったか、どんな料理を食べられたのか、いろんな事が興味津々に思い出され、解明できたらと思ひ、勉強もしたい。

又、ある研究会は「伊能図」を元に自分の足で実際に歩く企画もされているようで、ぜひ歩いてみたいと今から楽しみにしております。



# 九州支部例会報告

石川 清一

恒例の九州支部例会が平成二十四年六月三〇日（土）午後一時から、昨年と同じ「福岡市立南市民センター」において、一六名の出席を得て開催されました。冒頭、星埜代表理事からのメッセージ披露をおこない、初参加の新会員平野 実、城野幹丈両氏の紹介の後始まり、先ず講演一、「井上辰男氏復刻版故佐久間達夫著『伊能忠敬の長崎街道測量』について」は、井上氏による紹介で、同氏の所蔵本を複製し、会員の研究に資すればということと、九州支部一同の故佐久間先生への追悼の意をこめて発行した労作ということでした。講演二は、松尾紀成氏

「伊能忠敬の肥前測量」で松尾氏の地元佐賀領内の測量を詳述された。講演三は馬場良平氏「伊能忠敬の測量史跡を尋ねて」で佐賀、五島に加えて、千葉、東京と各地の史跡をスライドを使って紹介した。報告三件は、平川定美氏から佐世保における伊能記念碑計画の動向、馬場氏から八月に佐賀市で開催される大図巡回フロア展の話、松尾卓次氏の島原における伊能測量二〇〇年記念行事についてそれぞれ報告された。



講演に聴き入る参加者

した。この図は陸地測量部が明治二〇年作成のもので明治維新後近代測量により作成された一番古い部類の地図ではないかと思えます。江戸時代からの改変が少ない興味深いものと考えます。秋の研究旅行は、昨年延期した大分の県立「先哲史料館」に決まり、午後五時終了しました。続いて場所を移し、懇親会に入り、野田幹事の司会、長老松尾（紀）さんの乾杯で始まり、全員のスピーチで盛り上がり、いっしょながら賑やかなひとときでした。最後は遠路出席の平川さんの中締めでお開きとなりました、忠敬先生に感謝の一日でした。（いしかわ せいいち・九州支部長）



九州支部例会出席者の面々



明治20年陸地測量部作成の北九州付近の地図に見入る会員たち

各地で九州測量二〇〇年記念  
特別展開催!

九州測量から200年になるのを記念して、伊能忠敬記念館（千葉県香取市）では9月25日から11月18日まで特別展を開催中。東京国立博物館所蔵の中図も含め、国宝・重文93点を一挙に展示。また、佐賀県鹿島市でも10月19～21日に街をあげて記念事業を開催。小学生の伊能忠敬研究発表会や測量隊の食事再現など盛りだくさんの企画。詳しくはそれぞれのHPで。

**伊能忠敬 来鹿200年記念事業**

- 1 北九州ふるさとまつり  
日時: 10月21日(日) 9:00-  
会場: 鹿島市立中央公民館
- 2 伊能忠敬200年記念事業  
日時: 10月21日(日) 9:00-  
会場: 鹿島市立中央公民館
- 3 秋の鹿島まつり  
日時: 10月20日(土) 9:00-21:00  
会場: 鹿島市立中央公民館
- 4 第10回鹿島納鳥行あり  
日時: 10月20日(土) 17:00-  
会場: 鹿島市立中央公民館
- 5 伊能忠敬が食した食事再現  
日時: 10月21日(日) 10:00-  
会場: 鹿島市立中央公民館
- 6 伊能忠敬一千年の夢  
日時: 10月19日(金) 19:00-  
会場: エイブスホール

主催: 伊能忠敬来鹿200年記念事業実行委員会 問合せ: 鹿島市立中央公民館 0994-63-2101

# 『山島方位記』のデジタル化

去る八月七、八日に佐原伊能忠敬記念館に於いて『山島方位記』の撮影が行われました。

国宝の撮影とあって、記念館学芸員紺野氏が終始立会い、伊能忠敬研究会の渡辺一郎名誉代表、竹村基（三重県）宮内敏（地元）で行ないました。

撮影は保管室前の小部屋で補助光やフラッシュ等は用いず、手袋をはめての慎重な作業となりました。

当初撮影期間は四日を予定していましたが、二台のカメラを用いてたことと紺野学芸員のご協力があり、順調に作業が進み予定の半分の二日で終了することができました。

表紙など全てきれいに装丁されており、全巻で六七冊（若干差がみられるもののほぼB5版）、三九二〇枚に及ぶ膨大な量です。マイクロフィルムの時代まで遡らないまでも、一昔前では不可能な作業でした。デジタルカメラの機能アップとメモリー価格の激安化によるところ大です。

被写体は全体として良好で、シミや虫食いなど殆どなく、写り込みが少なく良い状態でした。しかし、一部に虫食がありました。判読できない程のものはありません。竹村氏によれば測量日誌に比べれば条件は良いとのことでした。

伊能忠敬自筆の重みを感じながら撮影作業は淡々と進行しました。

山島方位記は、昭和二六年二月、文

化財保護法により修理され、修理関係者名に左の記載がありました。

監督 文部技官 田山信郎

々 是源恭三

佐原町長 伊能源太郎

所有者 伊能康之助

伊能孝子 八四歳

施工 東京麹町 遠藤新吉

記載内容について

（書き方に二通り）

『山島方位記』の書き方に観測対象別と観測地別の二通りがあります。

はじめの頃の『山島方位記』の記載は観測対象別（山別）で書かれており、例えば富士山の項目に各観測地からの方位角が並んで書かれています。

しかし、多くの書き方は観測地別で書かれています。観測地点に対する各山々等の方位角が並んで書かれています。地図作成の上ではどちらが便利であったか不明ですが、東国に比べ西国のデータ量は際立って多く、観測対象別（山別）に作成することが作業量的に難しかったのかも知れません。

（記載される項目）

『山島方位記』の多くは観測地基準で書かれていますので、それについて説明します。

◎観測地の地名

例 肥前国藤津郡竹崎三  
地名の他、村境を示す「境」や「一」、「二」、「ハ」、「サ」等の記号を付している例も多い。

◎山（岬、島、岩）の名

山名	観測地	方位角	備考
利島	丙未	〇二〇	
相功山一	丙亥	一七〇	
同二	丙子	二〇〇	
同大山	丙午	二四〇	
房前舞山	丙申	二七〇	
富士山中心	丙酉	三〇〇	
房前測光	丙戌	三三〇	
房前舞山	丙亥	三六〇	
富士山	丙子	三九〇	
房前測光	丙丑	四二〇	
大室山	丙寅	四五〇	
小室山	丙卯	四八〇	
足高山	丙辰	五一〇	

例 金峰山三

山の名の他「一」、「二」、「右」、「左」、「甲」、「乙」等の記号を付している例も多い。

◎使用した方位計の種類

「半」、「甲」、「乙」、「丙」、「丁」、「庚」など記号で標記。

◎方位角

例 申二五分一五秒

現在の度分秒とは異なる標記。各山（島）一件につき一行で、使用方位計の種類、方位角を複数記入。

◎方位角の度・分・秒への換算

例 申二五分一五秒  
一分は三〇度、一分を三〇分割して分（一分は一度）。一分を六〇分割して秒（一秒は一分）。

申は子より数えて八番目なので申は三〇度×八＝二四〇度

二五分は二五度

十五秒は十五分

従って、申二五分十五秒は

二六五度十五分になる。

先進的研究をされている辻本元博氏は『山島方位記』の重要性を会誌「伊能忠敬研究」二〇〇六年第四三号で伊能忠敬の成果は「伊能図」にとどまることなく『山島方位記』をあげています。この方位記は地磁気偏角、地誌等の研究上重要なデータを提供していると述べています。

いずれDVD化されイノペディアから頒布される予定です。『山島方位記』のデータが入手しやすくなることで、『山島方位記』からの伊能忠敬研究が加速されることが期待されます。（M）



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり六頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。  
\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2400字(600字×四段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

### ②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。  
・写真 一般的なJPG形式またはTIFFまたはフォトショップのPS形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mmと350ppiのカラー写真の場合、100前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによってCMモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイルにしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておいてください。

### 送り先

・電子メール添付の場合 inohken\_kaiishi@koalanet.ne.jp

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいってください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方ほどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。  
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

### 四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール inohken@ae.aunone-net.jp

郵便振替口座 00150-012186100

### 伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「Inopedia (イノペディア) - 伊能忠敬と伊能図の大事典」  
<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」 現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料  
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」 忠敬関係の文献、画像資料  
<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

### 編集後記

◇本号は少し難産でした。いつものように多様な分野から興味深い内容の記事をお寄せいただいたのですが、投稿要領に合致するように書き直してほしかったり、少し解りやすく書いていただきたいと言って、著者にお返しした原稿も何編かありましたが、お忙しい中、せっかくなので書いていただいた方には大変申し訳ないと思っております。これまで何号か編集をして参りました。編集者としても、より中身の濃く、正確で親しみやすく、それでいてこの分野をリードする内容の研究誌にしたい。正しい欲がでてきまして、著者の方々の協力を頼むことにしました。◇さて本号ですが、これまでのシリーズものや各地の話題に加えて、あまり目につかぬこと、このなかの史料の翻刻や、伊能一族の方々の貴重な逸話なども掲載すること、これが順次このような内容の記事も充実させていき、忠敬先生の業績と人柄をあらゆる角度から語りあえるような場にしていきたく、編集者はさらに欲張っております。みなさまのご寄稿を楽しみにしております。